
メカニカルキングダム

雑月 桜華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メカニカルキングダム

【Nコード】

N7022I

【作者名】

薙月 桜華

【あらすじ】

少年アレンは知り合いの裏切りによって罪人となってしまふ。彼を刑務所に連れて行く男の言葉。

「この国の城から出られたら罪は無かったことにしよう。」
ゲームを受け入れ、機械仕掛けの城内から脱出を図るアレン。
ゲームに挑戦する者・ゲームを仕掛けた者・ゲームを嫌う者。
ゆっくりとそれぞれの歯車が回り始める。

第一話 ゲームへの誘い

第一話 ゲームへの誘い

アレンは木陰に座り、空を見た。昼の空は雲ひとつ無いためか、太陽の光を強く感じる。

太陽の当たっているところでは幼い子供たちが笑いながら走り回っている。彼らの足元から舞い上がる土煙。通行人は子供たちを見て顔をしかめる。雨が降っていないためか土が砂のようだ。簡単に舞い上がるために砂よりたちが悪い。

「おいおい。ここに居たのかよ。」

アレンが声のするほうを見れば、悪がき三人組が居た。名前を言うのも面倒な三人だ。

「なんだよ。何か用があるのか。」

悪がき三人はお互い笑うとアレンを見た。

「これから雑貨屋に行くんだが一緒に行かないか。」

「またかよ。なんでお前たちと行くんだよ。」

アレンは意味が分からないためか首を振る。なぜこいつらと行かなければならない。三人は彼の考えが読めているのか笑ってこちらを見ている。

「いいだろ。何か買ってやるからさ。」

何か買ってやるということだ。まあ、何かくれるならついて行ってみようか。アレンはそう思いながら立ち上がる。

「ふん。どうせなんかあるんだろ。」

アレンは背伸びをする。しばらく座っていたためか背伸びをしないとやってもらえない。

「さてと、行くか。」

悪がき三人組は雑貨屋に向かって歩き出す。その後ろをアレンも歩き出した。

太陽に当たる場所に出たためか、身体が熱せられて暑い。空を見上げれば太陽とも巨大な黒い塊が見えた。

黒い塊。それは、一言で言えばこの国の城だ。見える範囲すべてが黒いし触れられない。表面が熱いからだ。冬になると白い煙を立ち上らせる。この国でもっとも暑苦しい存在だ。なんとかして欲しいが、国王や王女が住んでいるのだからどうしようもない。国王は見たことがあるが、王女は話を聞くだけで見たことがない。一度は見てみたいものだ。

アレンは陽の当たる場所に出たためか体中が暑くなった。皮膚から汗が噴出してくる。汗をかきたくないのになんてことだ。

アレンは顔を流れる汗を拭いながら歩くと、金属音がぶつかり合う音が聴こえた。見れば子供たちが仕掛けで遊んでいるようだ。あぶないからと母親が子供を仕掛けから引き剥がしている。仕掛けはこの国中に存在する。子供が簡単に触れるほどだ。何時から在るのか、何の為に在るのかは今や誰も知らない。お城も何時誰が作ったかわからないらしい。考えてみればこの国は謎だらけなのだ。人々はそれを気にせず生きている。現状を受け入れた上で先を考えているのだろうか。

アレンは三人組と一緒に広場を抜けて、雑貨屋の前に着いた。

「よし、入るぞ。」

三人はそれぞれ入っていく。アレンも続いて入った。雑貨屋の中は外と同じ暑さだ。光が当たらないだけまだ良いかもしれない。店主を見れば鋭い目つきでこちらを見ていた。店主はいつもそうだ。

悪がき三人が品物をいじるのを良く思っていない。今回は四人とも適当なものを買って何か作ったが、さて今回も同じような物だろうか。彼は目の前の品物を見ていた。すると、悪がきたちの声が聞こえてくる。何か話しているようだ。少し距離があるためか聞き取れない。すぐに声は聞こえなくなった。彼は再び目の前の品物を見る。「行けえ。」

突然聞こえた声。アレンが振り返れば、悪がき三人組は外へ走っ

ていた。手に何か持っている。あれは、店のものだろうか。

「お前ら待て。」

続いて店主が動き出す。どちらも店の外だ。アレンはため息をついた。彼らは万引きを始めたのか。

「もう帰ろう。残念だ。」

アレンはうつむきながら店を出た。すると、目の前に足が見えた。彼はゆっくりと顔を上げる。そこに居たのは店主だった。

「お前。あいつらと一緒に居ただろ。あいつらは店のものを持っていなかった。俺が出て行った店内で、お前が何か盗もうとしたんじゃないのか。あいつらが罠になったんじゃないのか。」

アレンはすぐに首を振り、弁解する。ただ彼らに誘われて来ただけだと。

「それが万引きの誘いじゃないのか。お前だけを店内に残すことでまんまと品物を盗もうとしたんじゃないのか。」

アレンは勝手な言い分だと思った。何も持って居ない。品物は手に取ったがまた置いたのだ。

「ちょっと調べさせてもらうよ。」

店主はアレンの身体検査を始めた。そして、すぐに店主は何かを見つめる。店主の反応に彼は何なのかと思った。店主は笑い出す。

「おいおい。やっぱりお前も共犯じゃないか。こいつが尻のポケットに入っていたぜ。」

店主の片手には細長い棒状のもの。耳掻きだと思う。

「そんなの知らない。俺がやったわけじゃない。」

耳掻きなんて何時触れた。触れて居ないぞ。アレンは考えた。まさか、悪がき三人組が仕掛けたのだろうか。いや、それ以外に考えられない。あいつらは、アレンをはめたのだ。

「おとなしく警察に行こうか。」

店主の顔は恐ろしく気持ち悪かった。

アレンが警察に行くと尋問が始まる。彼が悪がき三人組のことを言っても何も変化は無い。彼らは目の前の獲物に食らいつくただけだ。

アレンと警察はやったやっついていないで言い争う。彼の発言空しく、店主の言葉や物的証拠から彼は追い詰められていく。暴力も振るわれた。しかし、絶対にやったと言わない。やっついていないのだから。「この書類を明日お偉いさん方が審議する。それであんたの今後が決まるんだ。楽しみにしとけ。」

警察官はなにやら色々書いた書類を机の上でそろえると部屋を出て行った。すぐに二人の警察官が部屋に入ってきてアレンを部屋から引きずり出す。そのまま長い廊下を何度か曲がって一つの部屋に通された。ここは留置所というやつの一室だろう。壁の一部分がくり貫かれて鉄格子が付いている。昼間のためか室内は暑いが、夜になれば寒くなるだろう。彼は明日も元気で居られるか心配になった。

判決は有罪だった。物的証拠が物を言ったということだろう。現場に居た悪がき三人組については特にお咎め無しらしい。全部アレンが罪を被る形になったのだ。怒りを乗り越して笑えてくる。これから刑務所らしい。さてと、どうしたらよいのだろうか。

「アレン君。ちよつといいかな。」

考え込むアレンに白髪交じりの男が話しかけてきた。どうみても彼をこれから刑務所に連れて行く人間の一人だ。

「なんだよ。連れて行くならさっさと連れて行ってくれよ。」

アレンは軽くやけになっていた。どう転がっても行くところは決まっているのだ。あとは遅いか早いかだ。

「それなんだがね。君の入れる刑務所がもう国内には無いんだ。だから、代わりに私たちとゲームをしないか。」

アレンは意味がわからないと思いつながら男を見た。

「君がこのゲームに勝てば罪は無かったことにする。すぐに自由の身だ。どうだい、やってみないか。」

男が提示したゲームはこの国の城にある地下牢から城外に脱出するというものらしい。通常は何年も牢に入ったままだが、この場合

は出てくればそれでおしまいということだ。脱出の間は誰も邪魔はしないし、危害も加えないらしい。

アレンは考えた。長い年月を刑務所の中で過ごすのなら、いつそのことそのゲームに参加してみるのも良いかもしれない。それに、運が良ければ城内なので王女に会えるかもしれない。

「わかった。そのゲームに参加する。」

男は笑顔で頷きながらアレンに近づいてきた。男は立ち止まり、彼の目を見た。

「じゃあ、早速始めようか。」

男は静かに始まりを告げた。

直後、アレンの視界はまっくらになり、意識は遠のいていく。

第二話 嫌う者、仕掛ける者

第二話 嫌う者、仕掛ける者

城内の一室。煌びやかな装飾が施された部屋。そのなかにアメリカは一人ベッドに腰を下ろしていた。

ドアをノックする音が聞こえる。ドアを開けて入ってきたのは執事のエドガーだ。若くすらつとした姿は王様の傍に仕えているセバスチャンとは正反対だ。

「アメリカ様。お食事の用意が出来ております。それと、明日からまたゲームが始まるとの事です。お気をつけください。」

アメリカは立ち上がり鏡の前に立つ。食事時といえど、身だしなみはきちんとする。

「心配要らないわ。今回も凶悪な奴なんですよ。」
アメリカは髪を整えながら言った。特に驚きもしない。何時もの事である。

「はい、話では殺人と盗みをした者たちだそうです。今回こそは城から脱出するでしょうか。」

エドガーは手帳を見ながら言う。

これまでの参加者の中で城から出ることが出来た者は誰一人居ない。城の何処かで亡骸が見つかることが多いのが現状だ。アメリカ自身も見つけたことがある。ひどい臭いの中、うずくまる男は何故かわいそうに見えた。何故はじめたのかと問われても彼女には分からない。いつの間にか始まっていたのだ。この行為が良くないことだと分かっている。しかし、実際に行っている人たちに言っても誰も聞かない。どうしようもないのだ。

アメリカは髪を整え終わるとエドガーを見た。

「そうね。面倒な事が起こらずに終われば良いわ。さあ、食事に行きましょう。」

二人は部屋を出て通路を歩き出す。遠くで金属音が何度かした。音が聞こえるのは珍しい事ではない。それは、この城が機械仕掛けだからだ。城内には至る所に仕掛けがある。それらを上手く利用して生活しているのが現状だ。

アメリカ自身は地下を歩き回った事が無いので分からないが、同じように仕掛けがあるのだろう。それが挑戦者の行く手を阻んでいくのかもしれない。

「何時もの事ですが、期間中はあまり城内を歩き回らないでください。もしものことがあつては困ります。」

アメリカはゆっくりと息を吐きながら何度か頷く。二人はエレベーターに乗って上の階へ向かった。

到着した先はアメリカの部屋よりももっと上の階。そこには食事をする広間がある。

アメリカは広間へのドアノブに触れると背後に居るエドガーを見た。

「ここまででいいわ。あとは大丈夫だから。」

アメリカはドアを開けた。広間には一つの長いテーブル。その端には王様が居る。彼女の父親だ。王様は彼女に気がつくがすぐに食事を再開した。彼女も反対側の端の席に座る。長いテーブルのためか相手と気軽に話せない。それが目的なのだろうと彼女は思う。母が居た時はもう少ししまとまったと思う。どうしてこうなってしまったのだろうか。気が付けば目の前に料理が運ばれてきた。彼女は料理を見ると、王様を見た。

「明日からまた例のゲームを始めるのね。選ばれた人はかわいそうだわ。」

王様がアメリカをちらと見た。彼はスプーンを置くとナプキンで口を拭いた。

「お前は口出ししなくて良い。これは私が始めたことだ。」

王様は立ち上がり、無言で広間を出て行った。抵抗空しく事は始まるようだ。

アメリカは一人用意された食事を食べた。

広間を出ると、エドガーが待っていた。二人はそのまま彼女の部屋に戻る。エドガーは再度明日の事を伝えると自分の部屋に戻っていった。

アメリカは部屋に入ると、ベッドに倒れこむ。食事はいつも王様と二人。食べ終わるタイミングもバラバラ。息苦しいったら無い。この二人の間に入ることの出来る者が居ないからこそその状況だろう。アメリカはゆっくりと起き上がると、部屋を出て暗い通路を一人で歩き出した。食事をした後は身体が熱くなる。こういふときは風に触れたい。彼女はエレベーターと階段を使って外に出た。外といつてもバルコニーなので城内である。ここからは城下町が見渡せる。風を感じられる場所だ。

アメリカは城内を歩き回ることには出来ても城外に出たことが無い。それ以前にどこにこの城の出入り口があるのかさえ分からない。彼女にとってバルコニーが唯一外の世界と繋がっている場所なのだ。

「今日は静かね。」

何時もはこの時間でも騒がしい声が聞こえてくる。人間が居るのだから騒がしくて当たり前だ。

今日は人間以外が発する音しか聞こえない。まるで誰も居ないのではないかと思えたが、家々には明かりがついている。

アメリカは手すりに寄りかかりながらしばらく風にあたった。

ふと城下町を見れば、何か大きな黒い箱を担いだ四人組を見つける。箱は樽三個分ぐらいの大きさだ。

「何が入っているのかしら。」

アメリカは四人組を目で追うも建物の影に隠れてしまったために追跡終了を余儀なくされた。中身が気になったが気にしてもわからない。

突然の強い風がアメリカの髪を揺らす。髪を結っていないためか乱れてしまった。彼女は片手で髪をかきあげる。

「そろそろ帰ったほうがいいわね。」

アメリカは冷めた体に触れると、城内への階段を下りた。
エドガーが言っていたゲームは午前零時から開始される。明日は城内が静かになるだろう。城内の者は極力部屋から出ないようにと言われているからだ。
挑戦者がアメリカの居る階まで到達するか、それ以前に朽ち果てるかは挑戦者の力次第だ。

王様は机に座り、数枚の資料に目を通していった。中身はゲームの挑戦者たちの情報である。殺人をした者が一人、盗みをした者が二人である。王様はため息をつきながら資料を机に投げた。

「万引き程度でこのゲームに参加するとはな。」
万引きをした人間を相手にゲームをする事になるとは考えていなかった。これまでゲームに参加した者のほとんどが殺人を犯した者だからだ。今月は犯罪者が少ないのだろうか。

ドアをノックする音が聴こえてくる。王様が対応すると雑務をこなすセバスチャンが部屋に入ってきた。白髪交じりの身長の高い男だ。

「王様。挑戦者たちが城の前に到着しました。ご確認を。」

王様は無言で立ち上がり城の出入り口へと向かう。その後ろをセバスチャンが付いて来た。

城の出入り口から大きな黒い箱が運び込まれた。箱を開ければ三人の罪人。今はすやすやと眠っている。

「我城へようこそ。」

王様は寝息を立てる三人に軽く挨拶をすると、運び手を見た。運び手は蓋を閉めて担ぐと城の奥へ消える。これからあの三人は地下の暗い闇の中に放り出されるのだ。再び会うことが出来るのはそのうち何人だろうか。

王様はそれを確認すると自室へ向かって歩き出した。

さてと、ゲームを始めようか。

第三話 三人の挑戦者

第三話 三人の挑戦者

アレンは暗闇の中。ゆつくりと目を開けると、首筋に何か変なものが付いている感触がある。それはゆつくりと移動している。首筋を動く何か。アレンはそれが何であるか分かったとき、悲鳴を上げながら飛び起きた。慌てて首や身体に付いた得体の知れない小さな何かを払う。薄明かりの中で動く何かは虫だった。彼は身震いする。「あん。なんだ。」

背後から間抜けな声が聞こえてくる。振り向けば暗がりに見知らぬ男が一人居た。眠そうに目を擦っている。その姿にアレンは身構える。

「だ、誰だあんた。あんたもゲームの挑戦者か。」
男は何も言わず立ち上がる。アレンよりも身長が高く体つきも良い。

「そうだ。そうじゃなきゃここに居ないだろ。俺はジェフだ。よろしく。」

アレンは反射的に自分の名前を言う。ジェフは握手を求めてきた。アレンはジェフの手を見て一歩下がる。その姿を見たジェフは参ったという風に両手を上げた。

「俺たちは殺しあうわけじゃないんだ。心配するな。」

アレンはジェフの言葉で恐る恐る手を伸ばす。ジェフはアレンの手を掴んで握手した。お互い手を離すとジェフは歩き出す。

「とりあえずこの牢屋から出るぞ。」

アレンはすぐに周りを見渡した。暗いためか先ほどまで気が付かなかったが、ここは牢屋だ。鉄格子の扉は閉まっている。ジェフは扉を掴んでいるが動かない。みるみる顔が変形していく。ジェフのうなり声が辺りに響くが扉は動かない。

「気持ち悪いわね。獣みたいな声出さないでくれる。」

どこからか女性の声が聞こえてくる。アレンはすぐに鉄格子に顔を付けて通路を見た。

「誰ですか。何処に居るんですか。」

今ここに居るということは彼女もゲームの挑戦者ということだろう。しかし、何処にいるかわからない。

「声からして若そうね。私はニーナ。よろしくね。」

アレンの言葉に反応するように声が聞こえた。ニーナも牢屋の中ということだろう。さて、どうやって出るのだろうか。

「おい、あそこに鍵があるじゃねえか。」

ジェフは通路を指差す。そこには鍵の束があった。アレンとジェフは鍵を手に入れようと必死に手を伸ばす。二人とも無意識にうなっていた。

「あんたたち何やってんの。」

ニーナの声が聞こえてくるが、どちらも反応する気がしない。アレンは鉄格子を離れて辺りを見る。すると、牢屋の隅に白い棒状のものが見えた。アレンは棒を拾って鉄格子から鍵に向けて伸ばす。

そのとき、通路の明かりによって手に持った棒が何なのか分かった。これは人の骨だ。

アレンは骨に驚き手から落としてしまう。彼は鉄格子から離れて骨を見た。汚れているが確かに人の骨だ。

「情けないな。そんなんじゃないぞ。」

ジェフはアレンが落とした骨を拾って鍵の落ちているところに伸ばす。距離は十分で難なく鍵を拾うことが出来た。ジェフはすぐに扉の鍵を探して開けた。アレンは何も出来ずその姿を見つめる。

「ほら、行くぞ。鍵が開けばここに用は無い。」

ジェフは鍵を持ったまま牢屋を出て歩き出した。

「ねえ、ちょっと。私もここから出してよ。ねえったら。」

背後からニーナの声が聞こえる。そういえば忘れていた。アレンはジェフから鍵を取るとニーナが居るだろう牢屋へ向かった。背後

からジェフの声が聞こえたが聴こえなかったことにする。

先ほどまで声しか聞こえなかったニーナは今アレンの目の前に姿を現した。長髪の髪は暗がりでも明るく目立っている。歳は確実にアレンよりも上だ。

「あなたがさっきの子ね。悪いけどここから出して。」

ニーナはアレンの持つ鍵束を見る。

「おい、そんな奴置いていけばいいんだよ。勝手にさせれば良いだろ。」

振り向けばジェフがアレンの鍵束を奪おうとする。アレンはジェフから逃れるように鍵束をニーナのほうに投げた。

「だったらあんただけで行けば良いだろ。」

ジェフは怒っているようだが一歩も動かない。ジェフ自身理解しているのだ。この先に一人で行かないほうが良いと。

ニーナを見れば鍵束から自分の牢屋の鍵を引き当てていた。すぐに扉が開く。

「ありがとね。」

ニーナはアレンの肩に手を置いて囁く。ニーナは年上のお姉さまといった感じだ。アレンはニーナから鍵束を受け取る。沢山の鍵がある以上、今後何処かで使うかもしれない。

「けっ。しょうがねえな。行くぞ。」

ジェフは目の前に続く石造りの通路を歩き出した。ジェフに続いて二人も歩き出す。

「はじめまして。アレンって言います。前の人はジェフです。」

アレンはニーナに自己紹介をした。

「勝手に自己紹介すんな。」

ジェフは歩く速度を上げる。アレンは一緒に行動するなら名前ぐらいは必要だと反論した。

「名前なんて記号だ。記号なんだよ。」

アレンはジェフの言葉が気になったがそれ以上は言わないことにした。通路の両側には明かりがある。その中を進みながらふと他の

二人の罪を聞きたくなつた。自分は万引きでここまで来てしまった。二人はそれぞれなんの罪でここにいるのだろうか。アレンはまず並んで歩いているニーナに聞いてみた。

「私はこの国で泥棒やってたの。運悪く掴まっちゃってね。黙って刑務所に居るのもなんだし参加したわけ。あなたは。」

アレンは自分の罪を告げた。すると、ジェフとニーナは笑い出してしまった。泥棒と万引きはやっている事はあまり変わらないが数の違いがある。二人はたった一回で掴まったアレンを笑っているのだらう。運の悪い事だよ本当に。

「そうか。俺は人を殺しちまってね。結果今ここに居るんだ。」

ジェフはひとりでに喋りだす。その言葉にアレンとニーナは立ち止まった。ジェフは何歩か進んだ後に気が付いて振り返る。

「なんだ。お前らは殺さないから大丈夫だ。殺して得することなんて無いだらう。」

ジェフは再び歩き出す。得する状態になつたら殺すのだろうか。ジェフとの間に溝が出来たような気がした。

歩き続けると地面が照らされた広い場所に出た。火の光では無い。これは月の光だ。見上げたアレンは言葉を失った。月に照らされた建物はこれまで見たどの建物よりも高い。遙か上空に見える建物の天井。どうやってそこまで到達しろというのだ。

「高いなこりゃ。この城どれだけでかいんだ。」

三人は遙か高さに見える天井を見つめる。ゆっくりと絶望が心を満たそうとする。しかし、このままここに居ても何も始まらないし終わらない。やるしかないんだ。

「行きましよう。」

アレンは一人歩き出す。背後から聞こえる声で二人とも付いてきていることは確認できた。

途中で分かれ道がいくつかあったが、片方の道を進んだ先には牢屋があるだけだ。この階は牢屋しかないのかもしれない。

暗い道を抜けて再び広い場所に出た。今度は沢山の明かりが壁に

つけられている。天井は高いようだ。入ってきた側の反対の壁には複数の扉が見える。しかし、今から入れる扉は一つだけで他は高いところにある。何故あんな場所にあるのだろうか。

「行けるところに行くしかないだろ。」

ジェフは反対側の扉へ向かって歩き出す。アレンとニーナが部屋の中心に向かつて歩き出したとき、どこからか機械の動く音が聴こえてきた。アレンは立ち止まり周りを素早く見る。見える範囲で変化は無い。アレンが再び歩き出そうとしたとき、鈍い音とともに部屋が揺れ始めた。

「どうした。何が起きたんだ。」

三人とも周りを見るが何が起きているのか分からない。石が擦れあう音が聴こえてくる。

「壁が動いているわ。」

ニーナの声に両側の壁を見れば、三人が居る階の壁がせり出してきている。このままでは押しつぶされてしまう。

「長居は無用だな。行くぞ。」

ジェフは扉へ向かって走り出す。戻っても何も無い。ならば先に進むしかないのだ。二人もジェフを追って走り出した。

ジェフが扉に手をかける。鍵はかかっておらずすんなり開いた。

アレンが両側の壁を見ればもう移動できる範囲が狭くなってきた。このままでは挟まれる。ジェフが入ると扉はしまった。

「ちよつと待て。」

アレンは扉を掴んで開く。彼が扉を支えた状態で先にニーナが入った。アレンも入ろうとしたとき、扉を押される感覚を覚える。見れば目の前に壁がある。アレンはとっさに部屋に入り込んだ。しかし、タイミングが遅かったためか扉が襲ってくる。アレンは勢い良く閉まる扉に弾かれて部屋の中に転がった。直後背後で大きな音がする。せり出した壁同士がぶつかったのだろうか。

「大丈夫、アレン。」

すぐにニーナが来てアレンを抱える。アレンは背中に強い衝撃を

受けたためか上手く呼吸ができない。なんとか声を絞り出そうとするだけだ。呼吸をしようにも上手く肺が動いてくれない。背中はいし呼吸はできないし苦しい限りだ。このまま死ぬのかと考えたとき、なんとか呼吸が出来るようになった。ニーナは「良かった。」と言っているが、アレンは反応する余裕が無い。

ニーナは部屋を見渡すとある方向を見ながら言った。

「この部屋は何も無いみたい。アレンが回復するまで休みましょう。」

「ため息が聞こえてくるが、ニーナは「大丈夫よ。心配しないで。」とアレンに優しく言った。」

第四話 人のかたち

第四話 人のかたち

アレンは重い扉を開く。目の前に階段があつた。壁がせまつてきた部屋から二部屋進んだらこの場所だ。この階はこれだけしかないということだろうか。背後を見ればジェフが部屋の中にある装置を見ている。

「なんで俺たちがパズル解かなきゃならないんだよ。」

ジェフは部屋の中央にある装置を蹴り上げた。アレンとニーナは無言で彼を置いて部屋を出る。彼は怒る立場には居ない。怒りたいのはアレンのほうだった。

アレンはニーナを連れて階段を上り始める。すると、ジェフが勢い良く扉を開けて出てきた。

「おい、勝手に先に行くなよ。置いていく気か。」

ジェフは先ほどの怒りがまだ残っているようで語気が強い。

「先に進まなければ出られないわよ。もたもたしないで早く行くの。」

ジェフが何か言いそうになるが黙りこむ。今は先に進まなければいけないのだ。

階段を上った先には扉。この先にまた何かあるのだろうか。下を見れば左下に先ほど居た部屋の扉が見える。

アレンはゆっくりと扉を開ける。中は暗い。完全に扉が開くと中に明かりが灯った。部屋は広く、先ほどまで居た部屋の倍はありそうだ。ただ部屋を連結したような形ではなく左右にも広がりがある。しかし、部屋には何も無い。部屋の中心に円形のマークがあることと反対側の壁の左端に扉があるだけ。

「なんなのこの広い部屋は。」

アレンが部屋に入ると続いてニーナが入る。アレンは背中に軽い

衝撃を受ける。前のめりになりながらも振り返ると、ジェフが二人の間に陣取っていた。

「早いなだよ。置いてくな。」

ジェフは二人に言うのと部屋の中心に向かって歩き出す。

「ねえ。あの扉の先ってさ。部屋無いんじゃないかな。」

ニーナの言葉にアレンは反応する。その姿にニーナは驚いている。「いや、だって。下の階はさっきの変な部屋と何も無かった部屋の二つでしょ。ここは二つ分の部屋の大きさがあるわ。だとしたらこの先にあるのは……。」

アレンはニーナの言いたいことがわかった。この部屋を出ると先ほど壁がせり出してきた部屋の上に出るということだ。しかし、それがなんだというのだ。入り口と出口は一つずつ。前に進むしかないんだ。

「けっ。なんも無いじゃんかよ。」

部屋の中央ではジェフが辺りを見渡している。おかしいぐらいに何も無い。ここも下の階にあった何も無い部屋なのだろうか。アレンはそう思いつつ歩き出そうとした時、ふいにジェフの身体が床に埋もれたように見えた。

「こつちに来るな。なんか変だ。」

ジェフはアレンたちの所に走ってくる。彼の背後に出現する突起物。その突起物は回転しながら天井に伸びていく。伸び続ける突起物、これは塔だ。塔は天井に付くかと思いきやなかなか付かない。アレンは気が付いた。天井も一緒に高くなっているのだ。

「な、なんだよこれ。」

塔の表面にはチェーンに繋がれた鉄球が綺麗に収納されている。アレンの背筋に冷たいものが走った。

「駄目だ。逃げよう。」

アレンは走り出す。回転する塔を避けて出口の扉に手をかけた。しかし、どうやっても開かない。ふと、扉を見たときアレンはゆっくりと後退した。

「嘘だろ。そんな……。」

アレンはわき腹に強い衝撃を受けて床に転がる。見上げた塔は沢山の鉄球を振り回していた。視界の端でニーナとジェフが駆け寄ってくるのがわかる。なんとか立ち上がると目の前の塔を見上げた。

「ねえ、大丈夫なの。」

アレンは声をかけるニーナをよそに塔の天辺を指差した。

「この部屋を出るには塔の天辺にあるボタンを押さなきゃ、いけないらしい。」

搾り出した声は自分の中に響いているように聞こえた。指差した塔の下部部分には鉄球がランダム配置されている。下手に触ったら骨が砕かれそうだ。塔の上部部分は何も無い。いや、見えないだけで何かあるのかもしれない。

「登らなきゃ。」

アレンは回転する塔に向かって歩き出す。それを制止するジェフ。無言で塔に近づくその姿は何故だか格好良く見えた。

ジェフは塔に手を差し出す。驚く間も無くジェフは塔とともに回転を始めた。信じがたいがジェフの手が鉄球に張り付いているのだ。回転しているために良く見えないが少しずつ塔の中心に近づいているように見える。

「アレン。あなたも行ったら。」

ニーナはアレンに語りかける。それはジェフ一人では心配なためだろうか。アレンは塔にゆっくりと近づく。ジェフは塔に張り付いたようだ。しかし、天辺まではまだ遠い。

「やるしかないな。誰かがボタンを押さなきゃ駄目なんだから。」

アレンは回転する鉄球の軌道上に手を出した。直後手に加わる力は鉄球に弾かれて痛手を負っただけだ。ジェフはどうやって鉄球に掴まったのだろうか。

「鉄球に身を任せるのよ。」

アレンはニーナの声に素早く振り返る。何か言おうとしたがニーナは塔を指差すだけだ。早く行きなさいということだろうか。

再度アレンは回転する塔を見る。鉄球に身を任せる。つまり、無駄な力は加えないということか。覚悟を決めると再度手を出した。力を抜いて鉄球を待つ。

直後ぶつかつた鉄球はアレンを身体ごと巻き込み回転をはじめた。アレンは鉄球に触る手を見る。先ほどよりも低衝撃でここまで来ることが出来た。しかし、鉄球に触る手が滑り出す。このままでは落ちる。アレンはとっさに反対の手でチェーンを掴む。途端に手が鉄球から滑り落ちた。チェーンを掴んでいなかったら遠心力で周りの壁に放り投げられていたかもしれない。

「しつかり掴まらないと落ちるわよ。」

どこからか声が聞こえてくる。アレンはその声を背にチェーンを掴んで塔の中心に向かう。

塔本体に手をかけたとき、真上にジェフが居る事に気がついた。その傍の塔の表面から塔の一部がせり出してくる。やはり何かあったようだ。アレンは塔にしがみつくに登りはじめた。頭上ではジェフが飛び出す塔の一部に苦戦している。せり出す塔の一部は掴む場所や足場を消滅させる。両手両足四つの内二つが同時に塔から離れたらおしまいだろう。

「大丈夫ですか。」

アレンはジェフに問いかける。しかし、ジェフににらみ返された。暇があるなら早く登ってボタン押せ。」

ジェフが塔に手をかけたとき、彼の両手が塔から離れてしまう。

「そりゃねえぜ。」

ジェフは両足でふんばるもバランスを崩してのけぞる。このままでは鉄球の真上に落ちると分かったとき、アレンはジェフに向かつて手を出していた。アレンはどうかジェフの手を掴むことが出来た。ジェフはアレンを見るが会話をする暇も無いと理解しているため、すぐに自分の体勢を整える。アレンもジェフが大丈夫なことを確認すると再度塔を登り始めた。ランダムに飛び出す塔の一部は二人の身体を攻撃する。それでも落ちたら死が見えるので落ちられな

い。

アレンは何度攻撃されようと天辺へ向かって登った。あとちょっとで天辺に届く。

「アレン。早く押せ。」

ジェフの声が聞こえる。アレンは手を伸ばして天辺を掴んだ。身体を引き寄せて天辺を見る。天辺はくぼみがあり、その中心に丸いこぶのようなものがあつた。他にボタンらしきものは見当たらないのでこれがボタんだろう。

「早く押せつてんだよ。」

アレンはジェフの声に押されるようにこぶを思いつき叩いた。こぶは塔の中に沈みこみ、塔の回転速度が少しずつ遅くなつていくやがて、塔の回転とともに塔は元の床下へと戻り始めた。アレンとジェフは塔が適当な高さになると飛び降りる。塔は消え去り、再び床が現れた。直後、金属音がする。

アレンは出口の扉に手をかけた。すると、今度は開いたのだ。先ほどの金属音は鍵が解かれた音だったようだ。振り返ればジェフとニーナがこちらを見ている。

「ありがとうよ。助かったよ。」

ジェフはそこで目を一度そらすと再度アレンを見た。

「それと、さつきはすまなかつた。協力無しじゃ進めそうに無い。」アレンは手を出す。その手を掴むジェフ。今後一緒に行動する上で支障ない関係になれたかもしれない。

「さつさと次に行きましょうよ。」

ニーナは二人をよそに扉を開ける。特に何もしていないから元気だ。ジェフが止めようとするが関係なく扉の向こうに消えてしまった。アレンとジェフもその後を追う。

ニーナの言った通りだった。ここは壁がせり出してきた部屋だ。足元はせり出してきた壁。壁にあつた複数の扉はこのためだったのか。

「さてと、次は何が出てくるのかな。」

ジェフは座りだす。アレンもその場に座った。先ほどの塔攻略で身体が痛い。少しでも休みたい。ふと、壁についている扉の一つがゆっくりと開く。扉の隙間に何か見える。アレンは素早く立ち上がった。

扉から落ちてくる布にくるまれた大きめの何か。音も無く床に落ちる。ジェフやニーナも異変に気が付いたらしく布でくるまれた何かを凝視した。

布にくるまれた何かは動き出す。人と同じほどの身長になり、布は払われた。中から現れたのは金属で出来た人の形をしたもの。それは各関節を滑らかに動かす様を確認すると、いきなり甲高い音を立てた。頭上に白い煙が出る。その姿にアレンは怯えて後退した。

「何故だよ。誰も邪魔はしないし、危害も加えないって言ってたぞ。」

アレンは刑務所に連れて行こうとした男の言葉を思い出した。確かに誰も邪魔はしないと云ったのだ。だとしたら今日の前にあるものは何だ。

「まあ、こいつがそれに当てはまるかどうかは謎だな。人間じゃなさそうだし。」

金属で出来た人型ロボットと言いつつ表すべきか。布を被って身体を隠せば人間にも見えそうだ。

この部屋は一度通った部屋。今出入りできるのは今入ってきた扉だけ。壁にあるほかの扉までは高さがある。相手を倒したら何か起こるのだろうか。

「とにかくやるしかないな。」

ジェフの声でアレンも構えた。直後、機械音が辺りに響く。この部屋に最初に来たときにも聞いた音だ。アレンは嫌な予感がした。

「壁がせり出してきたわ。」

せり出てきた壁は直角三角形で斜めの部分はぎざぎざがある。

ロボットを見ればせり出してきた壁に器用に乗っていた。本当に人間では無いのだろうか。

「早く上つて来い。押しつぶされるぞ。」

ジェフやニーナはせり出してきた壁に乗っている。アレンも壁に乗ろうとしたとき、ロボットが襲ってきた。金属で出来た拳が振り下ろされる。アレンはかわして壁の上に居る二人の元へ駆け寄った。「なんなんだよこいつは。まるで人間みた……。」

ロボットはジェフが言い終わる前に次の攻撃をはじめた。両側の壁は次の壁をせり出し始めている。

アレンはロボットの攻撃を腕で受け止めた。相手の材質が固いためか骨に響く痛さを味わう。これでは防御をしている暇は無い。だったら攻撃するしかない。

「硬すぎる。腕じゃなくて足を使うんだ。」

アレンたちは壁に登りながらロボットを蹴り飛ばした。腕では硬すぎて危ない。だったら蹴るしかないのだ。

「どうやったら止まるんだよ。」

ジェフが回し蹴りをロボットの首部分に当てる。ジェフは足を押さえるが、相手も衝撃でよろめく。すかさずアレンが追い討ちをかけた。顔を蹴り飛ばす。情けなど無い。勢い良く蹴ったロボットは床となった壁の上に倒れる。よろよろと立ち上がるも、両側からせり出した壁に押しつぶされた。

「やった。倒し……。」

ニーナの口はあんぐりとあいたままになった。同じ高さにある扉から先ほどと同じロボットが二体出てきたのだ。

「なんなんだよこいつら。」

迫り来る壁、高さを増す床、扉の高さになると追加される無言のロボットたち。いつの間にか壁のせり出す間隔も短くなっていた。

アレンは迫り来る壁に気をつけながらロボットを蹴り飛ばす。何度も蹴っているためか足が痛い。

「幾つ出てくるのよ。」

高さを増すごとに増えるロボットはアレンたちの力では太刀打ちできなくなっていた。

「転ばせるんだ。立ち上がるところを蹴り飛ばせ。」

ジェフの声が聞こえる。もはや回し蹴りをする力も無く、体力を使わずにいかにしてロボットを倒すかに切り替わっていた。アレンは迫り来る壁に向かってロボットを蹴り飛ばした。

せり出す壁が無くなったとき、その上には一体のロボットが残っていた。アレンたちは相当疲れており、息が荒くなっていた。それでも止められない。疲れを知らないロボットはアレンたちに迫ってくる。

「三対一を忘れんな。」

ジェフが飛び出す。彼はロボットを正面から捕まえた。どうにか床に倒そうとするが抵抗するためにうまく出来ない。

アレンはロボットの足に攻撃を加える。敵を床に倒したいなら足から全体のバランスを崩すのが良い。ロボットは頭と足で力の加わる方向が違ったためかすぐに床に倒れこんだ。そこへ手の空いていたニーナが追い討ちをかける。目の前で拳動がおかしくなっていくロボット。その姿は人間ではないものの、生き物であるように思えた。生き物を殺す罪悪感を払いながら夢中で攻撃する。

気が付けば目の前には無残な姿となったロボットが一体。身体はどこからか黒い煙を吐き出している。アレンは何かと思ったとき、すぐに咳き込んだ。何度か大きな咳をする。

「これって、石炭だわ。」

ニーナが鼻と口を服で覆いながらロボットを見ている。煙の出所は人間で言う内蔵があるあたりだ。そこに石炭がある。見た目は真っ黒い石だ。それを燃やすと燃料になる。

「こんなものを使っていてなんで煙が出なかつたんだよ。」

ジェフは石炭一つを熱そうに床に転がす。黒い煙が天井へ昇る。気が付かないだけで、他のロボットも破壊したときに煙が出ていたのかもしれない。この黒い煙は一体目に見た白い煙と何か関係があるのだろうか。そう考えるアレンの鼻に煙が入る。咳き込む中でここに長居するのは身体に悪いと思った。

「もう行こう。次が何だつてここには居られないよ。」

せり出してきた壁がすべて床になった今、部屋の外へ通じる扉は一つだけだ。アレンは何としても早くまともな空気を吸おうと扉に手をかけた。背後からジェフの声が聞こえたが構わず開ける。すぐに次の部屋に入り込み大きく息を吸った。空気は良いとは言えないがさっきの部屋よりは良さそうだ。

「扉を閉めなきゃ煙が入ってきちゃうわよ。」

ニーナとジェフも扉を閉めて入ってくる。新しく入った部屋は明かりが無く、どこからか淡い光で照らされている。光を追えば梯子の先、今居るところよりも上の階に光が見えた。目に見える光すべてが人工的な光だ。城外まではまだありそうだ。

「はっ、ははは。城の外までどんだけあるか見当も付かないぜ。」

ジェフは力なく座り込む。先ほどのロボットを倒したからといって何も変わらないのかもしれない。アレンやニーナも無言でその場に座り込む。

みんな何も言わない。何か言えるほどの気力はもう残って居ないのだ。

この道はどこまで続いているのだろうか。

第五話 三者三様

第五話 三者三様

目覚まし時計が鳴り始める。ハンマーで鐘を叩いているためか大きな音だ。王様は目覚まし時計を止めるとベッドから起き上がった。彼が居る部屋に自然な光など無い。存在するのは人工的な光のみ。部屋の外から漏れる光を頼りに部屋の明かりを付ける。

王様は眠気を追い払うと身支度をして広間へ向かった。城内は静かだ。そういえばゲームはどうなっているかと気になる。セバスチャンに何かあつたらすぐに連絡するよう伝えてあるから大丈夫だろう。彼は扉を開けて広間へ入った。何も言わずに席に着く。すぐに料理が出てくるわけではない。この待たされる時間もまた良いのだ。今日すべきことを整理していると料理が来る。テーブルの反対側にアメリカの姿は無い。今日も一人だ。以前は特に気にならなかったが、最近は寂しくなってきた。彼自身歳かと考える。

「王様、おうさま。」

王様が食事をしていると、勢い良く広間の扉が開かれた。入ってきたのはセバスチャン。なんだ騒がしいと王様はセバスチャンを無言で見た。セバスチャンはそんな王様の気持ち分かるためか、視線が合うと遠慮がちになる。

「お食事中失礼します。挑戦者たちが最下層前半を越えました。いかが致しましょうか。」

王様はセバスチャンの報告を聞きながら食事を続ける。ナプキンで口に付いた汚れをふき取ると席を立った。

「奴らを叩き起こせ。最下層を突破されるのは面白くない。」

王様は歩きながらセバスチャンに告げる。面白いのは最下層のみだ。下層はそれ以上の層と同じ作り。挑戦者が迷わずに出口を探し出したらおしまいだ。簡単に脱出されては面白くない。だったらす

べきことをするだけだ。

「念のため警備隊にも伝えておけ。城が止まってからでは困るからな。」

下層には城を動かす大切な設備がある。対策はあるが、下手に襲われては面倒だ。それともう一箇所大切な場所があるが、彼らが何か出来るわけでは無いので大丈夫だろう。

王様は自室に戻ると机の中から三つの資料を取り出して並べた。この資料には今回挑戦者たちを担当する三人の情報が記載されている。このゲームが面白くなるかつまらなくなるかは彼らの腕にかかっている。そこへ挑戦者三人の資料を広げて置く。

「さてと、誰と誰が当たるか楽しみだ。」

王様は各資料に人差し指で触れていく。カードは決まった。

あとは組み合わせだけだ。

アメリカは目覚める。ベッドに座り、頭を抱えた。気持ち悪い。

得体の知れない何かを吐き出しそうだ。ふと、一ヶ月前も同様のことがあったことを思い出す。理由はわからない。何故かベッドから起きると気持ち悪くなっている。時計を見ればいつも食事する時刻をとつくに過ぎていた。エドガーが呼びに来るはずだが、眠っていたのでそのままにしたのかもしれない。

アメリカは鏡の前で髪型を整えると部屋を出て広間へと向かった。城内は何時もより静かだ。彼女は大きく息を吸い込みながら歩く。

アメリカが広間に入るとテーブルの上に置かれた食器を給仕が片付けているところだった。ほんの少し前まで王様が食事をしていたということだろう。アメリカは何も言わず席に着く。しばらくすれば食事が来る。その間彼女以外音を発する者が居ない。静かな朝。アメリカだけの朝。

アメリカが食事を終えて広間を出るとエドガーが現れた。彼女は起こさなかった理由を聞かされて何度か頷く。しかし、それ以上に

聞きたいことがあった。

「そういえば、ゲームはどうなっているの。」

エドガーの情報によれば誰も脱落していないそうだ。ゲームが始まって間もないのだからそうだろう。ゲームの詳細は知らないが、さぞかし大変なのだろうと思った。

アメリカは過去に見た挑戦者を思い出した。物体と化した人間だったもの。特に何も無く城の者に撤去される物。彼女が見てはいけないモノ。ゲームの敗者が見る末路、傷だらけの体、漂う血の臭い。そこに至る前に何かがあったのだろう。挑戦者が死に近づく何かが。アメリカは出来るだけ部屋から出ないようにとエドガーに念を押され、自分の部屋に戻った。

アメリカはベッドに飛び込む。衝撃を受け止め、彼女の体を優しく包み込む。それでも、行動が制限された現状は精神的に息苦しい。このゲームで得するのは一体誰なんだろうか。

アレンたちが開けた扉の先は騒がしい部屋だった。複数の巨大な歯車が壁からせり出している。それらが他の大小の歯車を回し、また別の歯車を回している。

見る限り、前方は機械ばかりで道は見えない。後方を見れば先ほど居た部屋。

アレンは一人歩き出す。どこかに次へ続く道があるはずだ。温まった空気が頬をかすめる。熱を発する機械がこの部屋の何処かにあるのだろう。部屋の端まで歩くアレン。彼は呼び止める声に立ち止まった。

「ねえ、ここって上に登るんじゃない。」

アレンはニーナの声で見上げる。機械よりも上の位置が明かりで照らされている。つまり、ここから上に登れということだろう。しかし、何処から登れというのだ。

「どこかに登れる場所があるだろう。」

アレンたちはそれぞれ登れそうな所を探す。すると、忙しく動き続ける機械の間に上に通じる梯子があった。

アレンたちは梯子を登り始める。階段状に梯子が配置されているようだ。アレンが二つ目の梯子を登っているとき、これなら簡単に登れそうだと思った。しかし、彼が梯子を登り切ったとき、その考えがもろくも崩れ去る光景が目の前に現れた。梯子の付いていない壁が目の前にある。次の梯子が無いのだ。壁の終りはまだ遠く、その壁は掴めるところが無い。

「どうするのよ。梯子が終わっているじゃないの。」

背後からニーナの声が聞こえる。進もうにも前に進めない。アレンは周りを見る。ここから壁を越える方法は、一つしかない。

「機械の中を進めってことか。」

残りは真横で動いている機械の中を進むしかなかった。機械の一部が壁を越えた高さにある。機械の中を進めば壁は越えられるだろう。しかし、そこまで到達できるだろうか。

容赦なく回り続ける歯車が目の前に見えた。アレンは噛み合わせる歯車を見て、歯車に押しつぶされた自分を想像する。

「本気かよ。人間が歩ける場所じゃ……。」

「他に道は無いんだ。前に進むしかないだろ。」

ジェフがアレンの真横まで梯子を登ってくる。ジェフはアレンを見た。

「俺は行くからな。」

ジェフの目は本気だった。ジェフは次の瞬間、機械の中へ飛び込んだ。

アレンは声を出すことも出来ずその光景を見る。歯車に飲み込まれそうになると、下から小さく叫ぶ声が聞こえた。それでもジェフはなんとか前に進んでいる。

ジェフは安全なところに到達すると、次にニーナが来るよう合図した。彼女もためらわず機械の中に飛び込む。足取りにひやひやしたが無事にジェフの居る場所に到達した。

歯車が動き続ける中でジェフとニーナがアレンへ合図する。もう、アレンしか残っていない。

アレンは再度目の前で絶え間なく動き続ける機械を見た。目の前に存在する機械が自分の体を飲み込むと思うと怖くなる。彼は足が震えてしゃがみ込んだ。機械音の合間に微かに聞こえてくる声。ジエフとニーナの声だろう。先に行かずに待っているのだ。アレンを待っているのだ。アレンは目を瞑って大きく深呼吸をした。前に進まなければ生き残れない。

「もう、どうにでもなれよ。」

機械を睨むアレン。彼は足に力を込めて立ち上がる。半ば諦め気味の声が身体の中に響く。

「どうにでも、なれってんだよ。」

アレンは自ら発した声に弾かれて機械の中へ飛び込んだ。

第六話 扉の先

第六話 扉の先

アレンたちは光で照らされた広く何も無い場所に到達した。力尽きて床に転がるアレンたち。息が荒く、自然と身体を広げていく。

アレンが起き上がり周りを見れば次の部屋へ通じていると思われる扉。下を見れば階段状になった壁と巨大な機械の塊。今も歯車は回っている。必死になっていたためか何時の間にか機械の中を通過してここまで来てしまった。

「なんなのよ、この城は。まともな場所は無いの。城ってこういうもののなの。」

ニーナが起き上がる。乱れた髪を片手で整えている。続いてジェフも起き上がった。

「話に聞いたただけだが、明らかにこんなところは城内じゃないだろ。」

「城内だけだね。」

アレンは扉を見た。あの扉の先に、また何かあるのだろう。そろそろこんな場所は止めて城らしい所に入りたところだ。アレンは再び横になる。空腹だがどう仕様も無い。彼は目をつむり、再び動き出せる程度の体力を回復しようとした。

「おい、そろそろ起きろ。」

アレンは反射的に起き上がる。見上げればばやけた世界にジェフとニーナが立っていた。いつの間にか眠っていたようだ。

「済まない。すぐに行くよ。」

アレンは立ち上がり扉へ向かって歩き出す。手をかけた扉はすんなりと開き、アレンたちを次の部屋へと導く。

アレンたちが通された部屋は三つの扉がある部屋。アレンは扉に近づいてよく見てみた。扉には左から順に『force』、『sk

「ill」と「knowledge」と書かれている。背後で扉が閉まる音が聞こえる。

三人全員が部屋に入ったのだ。すると、どこからとも無く声が聞こえてくる。

「よくここまで来たね。まずはおめでとう。さて、君たちの目の前に三つの扉がある。その先にはそれぞれの試練が待っている。扉の選択はお前たちに任せる。三人が別々の扉を選んだ時、扉は開くだろう。」

声が聞こえなくなったとき、「force」の扉の先から唸り声が聞こえてきた。アレンは扉から離れる。

「この先に何かがあるっていうんだよ。」

アレンはジェフやニーナの位置まで後退する。これまでとは明らかに違う生物の気配。

「まずはどれを選ぶかな。必ず三つのうち一つは選ばないと先に進めない。」

ジェフが二人の前に出る。三つの扉が目の前にある。

「選ぶたってどうやって選ぶんだよ。嫌だからな。俺は「force」だけは嫌だからな。」

アレンは恐れている。「force」の扉の先に居る得体の知れないものに。

「じゃあ、私は「knowledge」にする。「force」とか自信無いから。「force」と「skill」は男二人に任せろわ。」

ニーナはアレンと違って冷静に扉を選ぶ。ニーナが「knowledge」を選んだ事についてアレンとジェフは特に何も言わない。ここでアレンが「knowledge」が良いと言い出したら冷たい視線が彼に集中するだろう。力が関係しそうなものは男担当と言っただ。

「じゃあ、残り「force」と「skill」だが……。」

アレンとジェフの視線が合う。アレンは「force」だけは嫌

だと目で訴える。アレンがジェフをじつと見ているとジェフの顔が歪んできた。

「じゃ、じゃあ俺が『force』だな。泥棒に『force』は無理だろ。」

ジェフはアレンから視線を逸らすと『force』と書かれた扉の前に立つ。アレンはほつとしつつも、ジェフに強制させたように悪いことをしたと思った。アレンとニーナも選択した扉の前に立つ。軽い金属音の後、目の前の扉はゆっくりと開かれた。

アレンは部屋の中に入る。部屋の光とともに部屋中に無数のろうそくがあり、それぞれが赤い炎を揺らせて辺りを明るくしている。ろうそくで囲まれた中央に居るのは布で覆われた人らしきもの。その背後に扉が一つ。アレンが扉から離れると勝手に扉は締め、再び金属音が鳴った。嫌な予感がする。

「ようこそ、『skiller』の部屋へ。私はジユダ。」
ジユダは布を払い、姿を現す。その姿は背の低い初老の男。白髪も少々見える。

「ちょっと待て。誰も邪魔はしないし危害も加えないって参加する前に言われたぞ。これはどういう事だ。」

ジユダは肩を揺らしながら笑う。そんなにアレンの言ったことがおかしいのだろうか。

「その言葉はまだ通用されない。この部屋を出た先から適用されるのさ。」

この部屋までとこの先とで何かが違うのだろうか。アレンはふとそう思っていると、ジユダが何かを探していることに気が付く。

ジユダはポケットから鍵を取り出してアレンに見せた。

「君が入ってきた扉には鍵を掛けた。これが私の背後にある扉を開ける鍵だ。次へ進みたければこの鍵を……。」

アレンは勢いに任せてジユダに飛びかかる。しかし、あっさりとかわされてアレンは壁にぶつかってしまった。アレンはぶつけた部分をさすりながら立ち上がる。

「落ち着け坊主。話を最後まで聞け。まあ、この鍵を賭けて勝負しろという事だ。お前の勝ちには私に参ったを言わせること。お前の負けは地面に倒れるか負けを認めた時だ。そうそう、もう一つある。この部屋はお前が入ってきた時点で密閉されている。部屋の中にはろうそく。酸素が吸えるうちに私を参ったと言わせることだな。」

アレンは構える。早く決着をつけなくては酸素が無くなってしま

う。

「小さいおっさんに負けられるかよ。」

アレンはジユダに殴りかかるもさりとかわされてしまう。続けて蹴りや拳を加えていくもなかなか当たらない。当たっても防御されるばかりだ。

「もつと頭を使え。この部屋が『skill』であることを忘れていないだろうな。」

アレンは考える。『skill』、『skill』とは何だ。力だけでは無いもの。『skill』とは力と知識を兼ね備えたもの。この場合の知識とは何なのだろうか。頭で考えていることとは別にはジユダへ向かって攻撃を仕掛けている。

「これではただの力押しだ。こんなものでは私を倒せないぞ。」

アレンはムキになってジユダに攻撃を仕掛ける。それらをことごとく防御していく。そして、気がついた。ジユダが一度もアレンを攻撃していないことを。

アレンは攻撃をやめて立ち止まる。

「どうした。もうお仕舞いか。」

ジユダはやはり攻撃してこない。攻撃させようとすればかりで攻撃してこないのだ。

「何故攻撃してこない。何故だ。攻撃する気が無いのか。」

ジユダは突然笑い出す。ジユダの声が部屋に響く。

「気がついたようだ。私は勝負すると言ったが、何で勝負するとは言ってない。君が勝手に攻撃してきたからかわしてただけだ。」

アレンはジユダの最初の言葉を思い出す。相手に参ったと言わせ

ることで勝負が決まるが、何で勝負するかは言っていない。しかし、一つ気になる事がある。

「地面に倒れたらってなんなんだよ。殴り合いで倒れたら負けってことじゃないのか。」

ジユダは肩をすくませて笑う。アレンにとっては気分の悪い光景だ。

「君が殴りかかってきたからそれに合わせたただけだよ。正直勝負の内容は何だって良いんだ。君の自由なんだよ。」

アレンとジユダの勝負は自由。そう、最初から自由だったのだ。ただアレンが勝手に殴り合いだと勘違いをして勝手に攻撃を仕掛けていただけなのだ。

「じゃあ、勝負の内容はこっちが決めて良いんだな。」

ジユダは無言で頷く。先程から息苦しくなってきた。早く終わらせなくては酸素不足で参ってしまっただろう。どうする、何をして決着をつける。ふと周りを見る。今も酸素を消費しているろうそくの炎。アレンは勝つ方法を頭の中で構築していった。

「決めたよ。ルールは簡単。順番にろうそくの炎を消していくんだ。最後の一本を消したほうが負けを認める。一度に消せるのは三本まで。僕が先に始める。それで、良いね。」

アレンは一気に言い終えるとジユダを見た。ジユダはじつとアレンを見ていたが、何も言わず頷いた。アレンはそれを確認すると近くのろうそくを三本吹き消した。

アレンとジユダは交互にろうそくを消していく。この勝負はうまくやれば先手が勝つことが出来る。説明の時に自分が先手で始めると言ったのはそのためだ。先手となったアレンは失敗をしない事だけを考えた。

ろうそくがさらに消えていく。火が灯っているろうそくが減れば、それだけ消費される酸素も少なくなる。勝負の途中で酸素切れで倒れては困る。倒れても負けだったはずだ。

アレンは消しながら残りの本数を数える。残り二十本ほど。残り

一本を残して相手に順番が回れば勝ちだ。

アレンは自分の心臓の音が聞こえてきている事に気が付く。焦るな、しっかりと考えて消すんだ。

火が点いているろうそくは残り六本になる。アレンが一本消せば次の相手の番で彼が負けることは無い。その次のアレンの番で決着が付く。ゆっくりとろうそくに近づく。アレンが吹き消そうとした時、

「早くして欲しいんだが、まだかね。」

アレンは予期せぬジユダの声に二本も消してしまった。彼はしまったと思う。これで次にジユダが三本消してしまえば最後の一本はアレンが消すことになる。それではアレンの負けだ。

アレンはろうそくから離れながら先程よりも一層息が荒くなっていることに気が付く。心臓がまるで玉のように胸の中で跳ね回っている。頭も痛くなってきた。そろそろ終わらせないと体が持たない。

ジユダがろうそくに近づく。三本消せばアレンの負けだ。声を上げて多めにろうそくの火を消すだけで意味がない。アレンにはもうなにも出来なかった。ふとアレンがジユダを見ると、彼がアレンに向かって微笑んでいた。その意味が勝利の微笑と捉えたアレンはその場に座り込む。アレンは早く勝負が決まってくれと願う。うつむきその時を待った。

「君の番だ。」

アレンは顔を上げ、最後のろうそくを見た。しかし、そこには火が灯った二本のろうそくがあった。彼は何も考えず、そのうちの一本を消す。まさか、勝ったのか。

アレンがろうそくから離れると最後の一本をジユダが消した。ジユダはその足で扉へ向かった。彼も酸素の少なさに参っているのか足取りがおぼつかない。

ジユダが鍵を使って扉を開け放つ。その瞬間、冷たい空気がアレンを包み込んだ。酸素が再び体の中をめぐる。アレンはその場

に座り込んだ。

「なんで、なんで二本残したんだ。」

アレンは扉のそばで座り込んでいるジユダに聞いた。お互い息が荒い。必死に酸素を体に取り込もうとしている。ジユダは何も無い天井を見ている。

「何故だろうな。全くもつてよく分からない。酸素のせいで無意識に行動していたのかもめないな。」

アレンにはジユダが勝たせてくれたのではないかと思えたが、この際どつちでも良いと思えた。アレンは勝負に勝ったのだ。

「さてと、他の勝負の結果を見に行こうか。」

アレンはジユダの声で部屋を出る。部屋を出た先には小さな広場があった。奥には上へ続く階段。振り返れば三つの扉。そのうちの二つの扉の先にジェフとニーナが居るはずだ。

残り二つの扉のうちのひとつがゆっくりと開いた。アレンの部屋から見て右側なので『knowledge』の部屋。つまりニーナが入った部屋だ。その部屋からニーナが出てくる。ニーナは特に見た目に変化は無いがしきりに頭をさすっていた。

「頭痛いわ。これだったら他の部屋のほうが良かったかも。」

ニーナはアレンに気が付くと驚き駆け寄ってくる。

「アレン大丈夫。顔色悪いわよ。」

アレンが酸欠で死にそうになったと言うとニーナは「ほら、いっぱい空気吸って。」と言ってくれた。

「『skiller』も終わったようですね。」

アレンは声のするほうを見ると、『knowledge』の部屋から長身の布を被った男がやってきた。こちらの男は布を脱がないらしい。

「私はヒューゴ。あなたがジユダとの勝負に勝った方ですね。おめでとう。」

ヒューゴはジユダと何やら会話を開始する。その姿を見るアレンの隣にニーナが来た。

「ジェフが来ないわね。まだ『force』は勝負が付いていないのかしら。」

アレンは『force』の部屋を見る。部屋に入る前に聞いた唸り声を思い出す。まさか、良くないことが起きているのではないか。そんな考えがアレンの頭をよぎる。そんな考えをジユダが悟ったのかどうなのか、ジユダが一人『force』の扉の前に向かって歩き出した。

「ルークのほうがどうなっているか覗いてみよう。」

ジユダは『force』の扉をそつと開けた。すると、直後ジユダの顔に何かがかかる。慌てて扉を閉めて顔を拭くジユダ。アレンはすぐにジユダの傍に駆け寄る。嫌な予感は当たっていた。ジユダの顔にかかったのは血だ。血が飛散るほどの戦いをしているのか。「またあいつは武器を使ってるのか。掃除が大変だから素手にしろとあれほど言ったのに。」

ジユダは服で顔についた血を拭いながらヒューゴのところへ戻っていく。ジユダと交代で今度はニーナが来た。

「どうということ。ジユダって人の顔に血が付いてたんだけど。」

目の前に見える『force』と書かれた扉。この先で、一体何が起きているのだろうか。

「ご両人。そこは危険ですからこちらへどうぞ。」

ニーナはヒューゴとジユダの元へ歩き出す。アレンは扉の前から動けない。やはり気になった。ジェフは無事なのだろうか。アレンは思い切って扉に触れようとする。

「やめろ。触れるな。」

すぐにジユダが来て扉とアレンの間に入り込む。ジユダは手をつぱいに広げて行く手を阻んだ。アレンは諦めてニーナのところに向かう。

「これはあなた方各人と私たち各人の勝負なのです。他の方が介入してはいけません。終わるまで待つのです。」

アレンはヒューゴの言葉に何度か頷く。頭に入ったがすぐに何処

かへ消えてしまった。扉の先が気になって仕方が無いのだ。

四人は固まってじつと『force』の扉が開くのを待った。

しばらくたって『force』の扉が開く。疲れて座っていたアレンは立ち上がり扉に向かおうとした。しかし、すぐにその足は止まる。出てきたのは知らない大男。全身血だらけだ。この男がルークだろう。ルークはこちらに気が付く。

「なんだ先に終わってたのか。しかも生きてやがる。」

こちらに向かってくるルークにジユダやヒューゴが説教している。漂ってくる血の匂い。ルーク自身全身血で染まっているのだから仕方が無い。

「ま、まさか。ジェフは。」

ニーナはアレンの後ろで小さくなっている。部屋からはルークの他は出てこない。良く見ればルークの身体には大量の血を流すほどの傷は見当たらない。悪いことばかりが頭に浮かぶ。アレンは結論を出すために『force』の部屋へ向かった。ゆつくりと扉を開ける。直後漂ってくる生暖かい血の匂い。視界に入ってきたのは血の水溜り。その中心にある物体たち。その物体が何であるかを考えたとき、身体の中から気持ち悪い何かがこみ上げてきた。それをなんとか抑えようと両手で口を押さえる。

「ねえ、ジェフはどうしたの。」

アレンは無言でニーナを制止する。これはニーナには見せられない。見せちゃ駄目だ。部屋の中には人間だったころの名残を所々に残す物体たちが転がっている。

ジェフは死んだのだ。原型を留めないほどに変形して。

ジェフの死体の周りには使用された武器が二つ転がっている。武器は二つとも同じようだ。戦いとしてはフェアだったのかもしれない。

ふいに強烈な罪悪感がアレンを襲った。『force』をジェフに選べたためにこのような結果が起きたのだ。アレンの頭の中が『もしも』で埋め尽くされていく。

気が付けばアレンはその場に座って泣いていた。ニーナの悲鳴で気が付いたらしい。彼女はアレンが制止したにも関わらず見に来たのだ。

「もう行こう。ここに居ちゃ駄目だ。」

アレンはニーナを連れて広場の奥にある階段を上り始めた。いつの間にか広場からルーク、ジユダ、ヒューゴの姿は消えていた。自分たちの役目は終わったからさっさと撤収したのだろう。アレンの中にルークを憎む気持ちは起きなかった。憎んでも、もうどうしようもないのだ。

アレンたちは階段を上った先の扉を開けた。見えてきたのは横に伸びた通路。これまでとは全くつくりが違う。まるで、お城の中だ。「やっと城内らしいところまで来たわね。」

アレンはジユダの言葉を思い出す。ジユダはゲーム参加前に聞いた言葉について、『この部屋を出た先から適用される。』と言っていた。つまり、今までは適用されない場所だったと。

アレンは天井を見上げる。まさか、ここからが城内なのか。

第七話 それぞれの思い

第七話 それぞれの思い

アレンとニーナは迷路のような道を歩き回った後、騒がしいところに出た。人々が無数の真つ赤な穴へ向かって石炭を放り投げている。温かい風がアレンの頬をかすめる。熱は穴から発生しているようだ。

「アレン。あそこ。」

ニーナの指差す方向を見ようとしたとき、目の前に交差した槍が現れた。アレンは驚き後退する。いつの間にか左右に一人ずつ鎧を着た兵士が居た。

「挑戦者よ。お前たちの来る場所では無い。速やかに去れ。」

「鎧つて、暑くないの。」

二つの槍がニーナの目の前で交差する。彼女は小さく悲鳴をあげて後退した。

「早く行け。時間を無駄にするな。」

アレンとニーナはしぶしぶその場から離れた。遠ざかると触れる空気の温度は冷たくなっていく。彼は大きく息を吐いた。

「なんなんだよ、あいつら。邪魔しないんじゃないのか。それとも俺たちに見られちゃまずいものでもあるのか。」

「そのことなんだけど……。」

ニーナは立ち止まり、アレンを見ると来た道を見た。

「見たの。奥にある扉が開いて石炭を運ぶ男たちが入ってきたわ。あの扉の先は外よ。そうじゃなかったらあの扉から外へはそう遠くは無いわ。」

ニーナはアレンを見る。そのまなざしは真剣でアレンは目を逸らしそうになる。

「だって、石炭を運んでいるのよ。わざわざ長い距離を運んできて

いるはず無いわ。」

アレンは通路の先を見た。だから、鎧を着た兵士が二人居たのか。挑戦者を通さないために。

「けど、それを知ったところで現状は変わらない。あそこを突破するには二人じゃ足りないよ。」

「二人じゃ、足りないわよね。ジェフが居れば良かった……。」

アレンはニーナの言葉を最後まで聞かずに歩き出した。脳裏に浮かんだジェフの姿を無理矢理かき消す。ふと気が付くと、アレンは大声を出していたようだ。声が通路に反響する。

「行こう。ゲームが始まってから何も食べていない。体力が無くなったらそこでおしまいだ。」

アレンたちには時間が無いんだ。

王様は椅子に座り、本を読んでいた。ゲームで何かあればセバスチャンが来る。それに期待しているのだ。最下層最後の三人に。その時、勢い良く扉が開かれた。セバスチャンが部屋に入ってきたのだ。

「王様。大変です。」

「なんだ。また掃除が大変なのか。」

王様はセバスチャンを見ずに本を読み続ける。特に驚いていないのだ。ゲームの駒にルークを選んだ時点で部屋が汚れることは知っていた。今回も派手にやったのだらう。ルークは挑戦者に容赦しない。ヒューゴやジユダも同様だ。

王様はページをめくる。ふと顔を上げると、セバスチャンは王様を見ながら慌てている。

「そ、掃除は必要ですが。三人のうち二人に最下層を突破されました。」

王様は考える。三人のうち二人も残ってしまったのか。死んだ奴はルークに当たった運の悪い奴だらう。さて、どうしたものか。

「城の人間には再度部屋から出ないように言っておいてくれ。それと、挑戦者にエレベーターを使われるのも面倒だ。専用以外は止めておけ。」

セバスチャンは返事をするとうちを出て行くとした。それを王様が止めにかかる。まだ何か足りないような気がした。

王様は何も言わず天井を見上げる。最悪の場合を考えて次の手を打っておくべきかもしれない。

「ハウエルを呼んで来てくれ。」

セバスチャンは王様の言葉を理解すると返事をしながら急いで部屋を出ていった。

王様は机に本を置くと、表紙を人差し指で軽く叩く。

挑戦者よ。どのような手を使ってでもこの城から出さない。出さないからな。

アメリカは柔らかいベッドの上に座っていた。朝早くに感じた気持ち悪さはいつの間にか消えていた。部屋でおとなしくしていたからかもしれない。

ドアが開けられる音。その音にアメリカは立ち上がり部屋の扉を見た。入ってきたのはエドガーであった。いつも以上に丁寧にドアを閉めている。それは、今がゲーム中だからだ。下手に大きな音を立てると城内の者が警戒する。それが身内が発生させた音だとしてもだ。しかし、ゲームを行っている側がドアの音にまで気を使わなくてはならないとは面倒だと思う。

「大丈夫ですかアメリカ様。」

エドガーは心配そうにアメリカを見ている。何時もの事だから仕方が無い。彼自身も心配というよりは毎日の仕事として来ている様に見えた。

「大丈夫よ。」

アメリカは部屋に置いてあるテーブルに座る。テーブルには幾つ

かの本があり、彼女はその一つを開いた。

「何かあったら呼んで。一人で大丈夫だから。」

アメリアは目の前にある本を見ながらエドガーへ言った。もうエドガーに用は無い。

「失礼します。」

直後ドアが開け閉めする音がする。再び部屋にはアメリア一人となった。すぐに彼女はため息をつきながら本を閉じる。ベッドへ寝転がると仰向けになった。ゲームの間は無闇に外に出られない。会った人全員に「部屋に居てください。」と言われるからだ。気軽に外の空気も吸いにいけない。

そこでアメリアは考え方を変えてみた。ゲーム中なので城内を歩いている者は少ない。見つかったら部屋に居るようにと言われる。だとしたら、見付からなければ良いのだ。ゲーム中なので城内で他の者に出くわすことも少ないだろう。

「抜け出しちゃおうかな。」

こんな部屋にずっと閉じこもっていても気分が悪くなる。朝起きたとき気持ち悪かったのは部屋に閉じこもっていたためだろうと考えた。城内の他の者に見付からなければ良いのだ。

アメリアは食事の後、エドガーが部屋から離れていくのを確認するとクローゼットの中から剣を取り出した。これは、アメリアのお母さんが持っていたものだ。王様に渡るのが嫌で貰った。使い道なんて無いのでクローゼットの中で眠りに使っていたのだ。

アメリアは剣を身に着けるとそっと扉を開く。彼女は通路に誰も居ないことを確認すると部屋を出て歩き出した。

第八話 王女と迷路

第八話 王女と迷路

アレンたちは通路に座り込んでいた。アレンもニーナも朝から何も食べていない。いや、今が何時なのかさえ分からない。体力も限界に近いと思った。

アレンが見上げた天井には人工的な淡い光。視界までぼやけそうだ。歩き回ったためか眠くなってきた。

「この城のどこをどうやって進めば良いのよ。まるで迷路よ。」
アレンの耳がニーナの声を拾う。そうだ、この城は迷路だ。出口の見えない果てしなく広大な迷路。見つけた階段はみんな一階分しか上れない。迷路を抜けても再び迷路の中に放り出されるのだ。動く気が無くなる。それでも行かないといけないんだ。

アレンはゆっくりと立ち上がると背伸びをした。
「行こう。上を目指さないと。」

アレンは歩き出すが、ふと振り返る。ニーナは立ち上がっていたが、付いてこない。

「どうやってこの城から出るのよ。こんなの無茶よ。」

ニーナはしゃがみこみ両手で顔を覆う。

「最初から私たちはこの城で終わる運命なのよ。そうなのよ。」
耐え切れず泣き出すニーナ。アレンは彼女に近づき、手を差し伸べる。

「まだ諦めちゃ駄目だ。行くところまで行ってみようよ。」
アレンはニーナの手を掴んで立たせると、そのまま彼女を引っ張った。彼女は泣きながら抵抗無く引っ張られるままについてくる。
「こんなところで諦めたらジェフに悪い。行くところまでいってか
らじゃないと駄目だ。」

アレンは誰に言うでもなくつぶやく。アレンたちはみんな罪を犯

した者たちだ。アレンだけは罫にはめられたと言ったほうが正しいかもしれない。なぜ、こんなことになってしまったのだろうか。ふと、ニーナの手を掴んでいるほうの腕が引つ張られる。ニーナが引つ張っているのだ。進行方向とは真逆のためアレンはのけぞる。

「階段。上に続いているわ。素通りするわけないわよね。」

気が付けば目の前に階段があつた。アレンはニーナの手を掴んだまま階段を上っていく。階段を上りきった先はこれまでの階とはつくりが違つように思えた。振り返れば上つてきた階段はさらに上へ続いている。アレンがそのまま階段を上ろうとしたとき、目の前に一本の剣が現れた。アレンは反射的に飛び退くが、剣の先は彼に向いたままだ。

「あんたたち誰。」

アレンが声の主はドレスを来た少女。ニーナよりも若い。いや、若いという点は良いとして彼女は誰だ。

「あなた、誰。城の人。」

ニーナはアレンの手を離すと名も知らない少女に近づく。のろると近づくニーナに名前も知らない少女は引いている。

「仕方ないわね。そうよ、私はアメリカ。この国の王女よ。あなたたち下層から来たみたいだけど。まさかゲームの挑戦者なの。」

「そうだよ。僕はアレン。彼女はニーナ。下層から来たつて言うてるけど。下層つて、何。」

アメリカは交互にアレンとニーナを見ている。大きく息を吐くと何か納得したようだ。

「アレンとニーナね。下層つていうのはこの城の下から二番目の層のこと。ちなみに一番下が最下層。下層の上が中層、上層と最上層つて続くわ。ちなみにここは中層。」

アメリカの話ではこの城は相当大きいらしい。多分最下層は牢から城らしいところに出るまでの場所だろう。人らしい人が居る場所は下層かららしい。

「それよりも何か食べたいわ。ねえ、何か食べ物無いの。このまま

「じゃ本当に死ぬわ。」

アメリカは近づいてくるニーナから逃れようと後退する。既に死にそうな雰囲気のないニーナが言うとはやはり説得力がある。

アレンはニーナの発言が間違っていないと思ったのでアメリカに向かつて大きく何度も頷いた。何か食べたい、なにかたべたい。

「そうね。ゲームがどうなるかと私には関係ないけど、空腹で死なれるのはまずいわ。苦しんで死んだ姿なんて見たくないもの。それに……。」

アメリカは剣をしまつと周りを見回す。何か気にしているようだ。釣られてアレンも周りを見た。見ても特に何も無い。人も見当たらない。

「誰かに見付かるのはもつと面倒だわ。早くここを離れなきゃ。こっちに来て。」

アレン、ニーナはアメリカの後を追って移動を始めた。これは「誰も邪魔はしない」という事に反する気がしたが、こちらからも頼んでいるので気にしないことにした。

通されたのは小さな部屋。部屋の端にベッドがある。誰かの部屋だろう。アメリカの部屋だろうか。彼女はテーブルの上に置かれた本を別の場所に移動している。軽くテーブルも拭いた。

「椅子に座つて。それと、他の人がこの部屋に入つてこないように鍵閉めていくから誰か来ても反応しないでね。」

アレンとニーナが椅子に座つたことを確認すると足早に部屋を出て行った。扉を閉めると鍵がかかる音がする。

「まさか、閉じ込められたわけじゃないよね。」

アレンは椅子から立ち上がり、扉を確認する。小さなつまみがあった。回すと鍵が開いた。もう一度鍵をかけてニーナの元に戻る。

「出られる事は出られるらしい。だけど、ここから出てどうしようもない。彼女が戻ってくるのを待とう。」

アレンは暇なので部屋の中を見渡した。アメリカが部屋を出るときに鍵をかけていったので彼女の部屋なのだろう。

その時、扉を叩く音が聞こえた。誰かが来た。

「アメリカさま。いらっしやらないのですか。」

アメリカを知る人物のようだ。声から男だとわかる。アレンとニーナは黙ってじっとした。

「どうしたのエドガー。」

扉の外からアメリカの声が聞こえてくる。男はエドガーという名前らしい。

「お食事の用意が整いましたのでお連れしようと思ったのですが。」

「見れば分かるでしょ。今日は部屋で食べるわ。容器と入れ物はきちんと返すから大丈夫よ。ゲームが終わるまで食事は自分でもらいに行くからあなたは呼びに来なくていいわ。」

「しかし、……。」

エドガーの声から戸惑っている事がわかる。

「戻って、あなたがここまで来る間に挑戦者にあつたらどうするの。そっちのほうが面倒だわ。いいから戻りなさい。」

アメリカの声から、エドガーは無理やり追い返されているようだ。エドガーはアメリカに何か告げると部屋を離れていった。何を告げたかはアレンの位置からは聞き取れなかった。

扉は開かれ、アメリカが部屋に入ってくる。手には取っ手の付いた大きめの木箱とビン。透明なビンの中にはなにやら液体が入っている。

アメリカは二つをテーブルの上に置く。突如木箱に付いた取っ手部分が飛び出し、箱が解体していく。

「うお、なんだこれ。」

アレンは突然のことにその場から離れようとするが、椅子ごと倒れてしまう。ニーナを見れば器用にテーブルから離れていた。案外落ち着いているのかもしれない。

「はい。ご飯よ。」

アレンはテーブルを掴んで箱の中を見る。中には野菜をパンで挟んだものと丸い肉の塊があった。見ているだけでよだれが出てくる。

「はいはい。食べただけ食べなさい。」

アメリカはアレンとニーナの前にグラスを置いて、ビンの中の液体を注いだ。

アレンは準備された食事を目の前にガマンすることは出来ず、さっそく頂いた。空腹を満たすように食べ物を胃に収めていく。

気が付けばアレンもニーナも椅子にもたれかかり、何処か遠くをぼんやりと見ていた。

「満足したみたいね。」

アレンが姿勢を正せば、アメリカは箱の中に残った食べ物を食べ始めていた。二人がお腹いっぱい食べたにもかかわらずまだ箱の中に残っているのだ。

「で、あなたたちの罪は何。殺人、それとも泥棒。」

アレンとニーナはどちらも泥棒と応えた。

事実だから仕方が無い。しかし、アレンについては良い機会なので何故掴まったかの話をした。

「ちょっと待って。それじゃあ、あなたは無実の罪でこのゲームに参加したの。」

アメリカは驚いている。当たり前だ。罪を犯していない人間がゲームに参加しているのだから。

「無実の罪でゲームに参加か。これならおとなしく刑務所に居たほうが安全だったかもね。」

ニーナはグラスに入った液体を飲む。アレンも一口飲んだ。アメリカが持ってきた液体は良く分からないものだったが、甘くておいしい。

「あなたそれで良いの。罪を犯していないのよ。このゲームに参加する必要なんてなかったのよ。」

アメリカは立ち上がりアレンの前に立つ。

「あなたたちの最終目標は何。」

アメリカの迫力に押される。アレンより年下だと思われるのに何故だろう。

「城の外へ出ることに。それがこのゲームの終り。」

ニーナがつぶやく。アメリカは目をつむり、ニーナを見た。

「いいわ。外へ連れて行ってあげる。ただし。」

アメリカはテーブルに手を付いて二人の顔を交互に見た。

「この城から出たからといって罪が無くなるなんて思わないことね。」

アメリカはテーブルを離れるとベッドに寝転がった。

アメリカはアレンが無実の罪だと信じているようで、実はそうでは無いのかもしれない。

第九話 出口を探して

第九話 出口を探して

アレンたちはアメリカとともに部屋を出た。彼らはしばしの休息の後、再び迷路に入り込むのだ。

アメリカを見れば腰に剣を携えている。先ほどアレンの行動を止めた剣だ。彼女のような王女が何故剣を持っているのだろうか。やはり護身用だろうか。

「行くわよ。付いてきて。」

アメリカを先頭に城内を移動する。右へ左へと何度も曲がる道順は、アレンの脳をあざ笑う。

「さつき執事と話したんだけど。城内のエレベーターが止まっているらしいの。階段を使うしかないわね。」

アレンは先ほど居た部屋へ戻る道を見失い、ただアメリカの示す道を辿るだけとなった。ニーナを見れば、角を曲がるときに別の道を確認するぐらいでアメリカの後をしっかりと追っている。階段を何階か上ると迷路に入り、迷路を抜けるとまた階段を何階か上る。

「止まって。」

アメリカは通路の途中で立ち止まる。両側いっぱい広げた腕に遮られるようにアレンたちも立ち止まる。目の前はただの通路。何があるというのだろうか。

「私が良いって言うまで動かないで。」

アメリカは歩き出すとある位置で足を引っ込める。直後、アメリカの目の前に壁が現れた。両側から壁がせり出してきたのだ。

「おいおい。なんだよこれ。」

これではまるでトラップである。ゆっくり歩いていたら挟まれていただろう。それにしてもこんなものが通路の途中にあるなんて考えていなかった。この城で生活している人は大丈夫なのだろうか。

「城の中にはこういう仕掛けがいっぱいあるわ。城内の人間は仕掛けのある場所には近づかないから大丈夫なの。」

つまり、この道は普段城内の者が使わないらしい。アメリカの話では、ここを通れば他の道を通るよりも早く上の階にいけるそうだ。数秒の後、壁は左右に分かれて両側の壁の中に収納された。

「私が先に向こう側に行くから見といて。」

アメリカは少し後退すると、勢いをつけてジャンプした。着地するとすぐに背後に居るアレンたちを見る。壁はせり出してこない。仕掛けがある場所の床を踏まなければ大丈夫そうだ。

「私がジャンプしたところで同じようにジャンプして。」

ニーナが先に跳ぶ。何事も無くアメリカと合流するニーナ。

アレンも合流しようと勢い良く跳んだ。少し遅れてアメリカの驚きの声。アレンが着地すると直後背後に大きな振動が発生する。アレンは体勢を崩して床に倒れた。背後を見れば壁が出来上がっている。着地する時にせり出す壁の床部分を踏んでいたらしい。

「危なかったわね。大丈夫。」

ニーナがアレンに手を差し伸べる。このやさしさがうれしい。アレンはゆっくりと立ち上がった。

「気をつけてよね。一歩間違えば身体が半分に割れてたわよ。」

アレンはアメリカに反論しようかと思っただが、彼のみ失敗しそうになったため特に何も言えなかった。これならもつと安全な道を行きたい。

「もたもたしてられないわ。行くわよ。」

三人は再び走り出した。途中城内の人間がうろついていたが、背後を通るところで見付からずに済んだ。さらに階段を上って上を目指す。

「エレベーターさえ動いていればこんな面倒なことをしなくて済むのに。」

アメリカは走りながらぶつぶつとつぶやいている。エレベーターが使えるのならすぐにでも使いたい。

幾つの階段を上り、幾つの角を曲がったのか。そんな事をアレンが考えることもなくなった時、彼の視界が白で塗りつぶされる。

アレンとニーナはほぼ同時に呻く。アレンは手で視界を遮ろうとする。目が使い物にならなくなるのではないかと思った。

「あなたが来たかったのはここでしょ。」

アレンはアメリカの声に導かれるようにゆっくりと視界を認識しようとする。真っ白い視界が色を帯びてきた。

「ここ、外だわ。外に出られたのよ。」

アレンはニーナの声で視界がはつきりした。目の前に現れたのは太陽に照らされた町。アレンたちの町だ。事件を起こした雑貨屋もここからは見える。やっと外に出られたのだ。

アレンはひとりでに笑い出す。これまでの辛い出来事が思い出される。すべて終わったのだ。やっと、終わったのだ。

「けど、ここって出口じゃないみたい。」

ニーナの一言でアレンは現実无理やり引き戻される。笑いもぴたりと止まった。何故出口ではないのだ。アレンが周りを見ると、外は見えた。ここは城から突き出た場所。バルコニーと言えば良いだろうか。外であって外では無い場所だ。

「あれ、城の外だからここで良いかなって思ったんだけど。違うの。」

アメリカは首をかしげて悩んでいる。間違っでは居ない。ここも城の外だろう。しかし、ここは城内の外と呼べる場所だ。城外では無い。アレンは力無くその場に座り込む。大きく息を吐いた。傍ではアメリカが慌てている。ニーナを見れば同じように座り込んでいた。二人ともお疲れなのだ。

「けど良かった。また太陽を見ることが出来て。」

アレンは自然とそんな事を言っていた。城外に出ることは出来ないが城外を見ることは出来た。アレンはゆっくりと立ち上がり、アメリカを見た。

「ごめんなさい。ここ以外に外に繋がっている場所は知らないの。」

だって、私も外に出たこと無いから。」

アレンはアメリカの言葉に驚くが、外が見える場所まで来たのだ。何処かに出口があるはず。それを見つけることが出来るはずだ。

ニーナが立ち上がる。背伸びをすると胸の形が見えたが見なかったことにした。ニーナがアレンを見ている。それも見なかったことにした。

「出口を探しましょう。外が見られたんだから出口も見付かるわよ。あなたも外に出たいでしょ。」

ニーナの言葉にアメリカは頷いている。三人とも立ち上がり、再び動き出す準備を始めていた。

アメリカはバルコニーから下を見下ろす。何かを確認するとそのまま城の中へ入っていく。

「付いてきて。今度は下るわよ。」

アレンたちは今来た道に戻って五階ほど下りる。この五階は先ほどアメリカがバルコニーから目視で確認したものだ。この階の前後に出口があると考えて探したほうが良いだろう。

「あとちょっとよね。あとちょっとで外よね。」

ニーナはうれしそうだ。目の前に出口が見えたら迷わず出て行きそうさ。

「出口、無いわね。」

アメリカの言う通り、彼女が目星をつけた階前後を探しても出口らしいところは見当たらなかった。他の階を探そうかと移動を開始したとき、角から兵士が現れた。

「あ、アメリカ様。なんだお前たちは。」

兵士の視線はアメリカからアレンたちに移動していた。見付かっつてはいけない人間に見付かっつてしまったようだ。考えてみたら王女を連れまわしているのだ。その気が無くても傍から見ればそうなる。このまま捉まれば城を出ようにも出られなくなるのではないか。そんな一抹の不安がアレンの中を巡った。

気が付けば、アレンはアメリカの手を掴んで走り出していた。背

後からニーナの声。振り返ればニーナがアレンたちを追いかけてきている。それを追う兵士。兵士は仲間を呼ぼうと大声を張り上げている。さてどうしたものか。

「掴まないで。」

アレンはアメリカに掴んだ手を払われる。怒ったのかアレンの前を走り出した。アレンはショックだったが、この際気にしていられるほど暇では無い。

アメリカを先頭に三人は何度も角を曲がり、階段をいくつか下りた。走る距離が長くなるに連れて兵士がアレンたちから離れていく。どうにか撤くまで走り続けなといけない。さらに走った。アメリカが背後をちらつと見る。

「あそこ、あそこの部屋が良いわ。」

アメリカは通路先に見える部屋を指差した。彼女は近づくと扉を開けようとした。そこへ、アレンとニーナが扉に体当たりするように向かっていく。アレンが扉に到達する寸前で開いたため、アメリカを巻き込んで部屋になだれ込んだ。

三人が部屋に入ると、扉が閉まる音がした。

第十話 本当の姿

第十話 本当の姿

アメリカは扉が閉まる音で顔を上げる。あたりを見回し、灯りがついていることは確認できた。誰か居るのかもしれない。彼女は背中に乗ったアレンとニーナを退かした。

「痛いわね。勢いでなんとかなると思わないでよ。」

アメリカは起き上がる服の汚れを落とした。すると、目の前に老人が居る。彼の視線はアメリカに向けられていた。

「セシリア様。セシリア様じゃないですか。」

アメリカは老人の言葉に何が起きたのか現状を把握できて居ない。意味が分かって居ないのだ。セシリア様って一体誰。母親の名前でも無い。

「セシリア様……。」

老人は何かを感じ取り扉へ向かう。扉、扉の先にはまだ兵士が居るかも知れない。アメリカは立ち上がり老人の前に立ちはだかる。

「待つて、その扉を開けないで。兵士に見つかりと面倒なの。」

老人はアメリカを見ると、奥にある部屋を指差した。アメリカ、アレンとニーナはすぐに奥の部屋に移動する。

アメリカは隠れた場所から扉を見た。老人はこちらを一度見ると扉を開ける。外から聞こえてきたのは先ほどの兵士の声。どうやら他にも兵士が二、三人居るようだ。老人はこちらにはアメリカが来ていない事を言うて扉を閉めて鍵をかけた。

「出ておいで。セシリア様。」

アメリカが飛び出し、老人に近づく。セシリア、セシリアとアメリカと誰かを勘違いしているのだろうか。

「さっきからセシリア、セシリアって。私はアメリカ。ア・メ・リ・アよ。間違えないで。」

老人は何か納得したように口を半開きの状態で頷いている。そして、アレンたちを見た。

「アレンとニーナ。ほんの少し前から知り合いよ。」

アメリカはアレンとニーナを見た。説明としては間違っていない。アレンとニーナは奥の部屋から出て老人に近づいてくる。

「知りたいことがあるの。この城から出るにはどうすれば良いの。何処から出られるの。」

アメリカは老人を見た。彼なら知っているような、そんな気がした。

老人は何も言わず天井を見つめる。その時間は数秒だったか一分だったかアメリカには分からない。

「出口は三つあります。一つは資材を城内に運び込む専用の出入り口。もう一つは城内の者が自由に使用できる出入り口。それと、今は使われていない小さな出入り口があります。」

一つ目は聞いたことがある。この城を動かすための石炭などを運び込む出入り口だ。たしかそこへ行くためには下層からでないと思目だ。ここからでは難しい。二つ目は先ほど探していた出入り口だろうが三つ目はわからない。

アメリカが二つ目の出口について老人に聞いてみるも自由に行き来できるのだから見つけることが出来るはずですと言っただけだ。アメリカたちは見つけることが出来なかった。

「変ですね。扉が閉められているのかもしれませんが。」

扉が閉められることもあるらしい。出たい時に出られないとは役に立たない出入り口だ。

アメリカは気を取り直して三つ目の出口について聞いてみる。

「今は使われていない小さな出入り口です。」

アメリカの知らない出入り口。一つ目と二つ目が駄目な以上、この出入り口に頼むしかなさそうだ。

「その出入り口は何処にあるの。お願い。私たちに教えて。」

老人はアメリカの言葉にアレンとニーナを見る。

「これが駄目だったら本当に出られないわね。」

ニーナは半ば諦めた様子でアメリカを見る。アメリカは老人を見た。

老人はゆっくりと頷いた。

「わかりました。しかし、そこまでの道のりが複雑ですのでご案内しましょう。」

老人は歩き出し、扉を開けて外を見る。外の様子を見るとアメリカたちを見た。

「誰も居ません。さあ、行きましょう。」

老人とともにアメリカたちは歩き出す。老人が前を歩く中、アメリカはふと周りを見渡す。自分が一度も着たことの無い場所だった。こんな場所は知らない。城の中を歩き回っているのに今まで知らなかった。いや、だからこそ老人が三つ目の出入り口を知っていてアメリカたちを案内してくれているのだろう。

老人はしばらく歩くところある部屋で立ち止まった。腰から鍵の束を取り出して扉の鍵を開ける。

「この部屋に入ってください。」

アメリカが部屋に入ると暖かい空気が身体に触れる。明らかに通路とは温度が違う。アレンやニーナを見れば二人とも暑そうだ。

「これがこの城の核です。さあ、あの扉から先に進みましょう。」
部屋の中心には丸い塊が浮かんでいる。アメリカにとっては何故どうして浮かんでいるのかは分からない。けれど、これが止まったら恐ろしいことになるだろうと思った。

老人のあとを追うアメリカの身体がぴたりと止まる。彼女以外の何か彼女の足を止めている。前に踏み出そうにも踏み出せない。耳元で誰かがささやいた。すぐさま聞こえた方向を見る。目の前には丸い塊。丸い塊は一定時間ごとに点滅を繰り返している。彼女はその塊に近づくと、何かに操られている如く彼女は一步步進む。

「駄目だ。やめなさい。」

アメリカは何処か遠くで声が聞こえたが反応することができない。

彼女は左手で核に触れようとする。この暑い部屋でさらに暑い場所。その時、アメリカの左手が変形する。皮膚が波打ちその下から銀色の何かが見えた。彼女はそれが何であるかを理解する間も無く背後に引つ張られた。引つ張ったのは老人だ。彼女は体勢を崩したまま老人に抱きつく。彼女は老人にしがみつ়中、先ほどの光景を思い出した。前に同じ光景を見たような気がする。何時見たのだろうか。

「思い出さないほうが良いです。」

老人の声にアメリカは顔を上げる。老人は目を合わせることはしない。視線の先にはアレンとニーナ。彼女はすぐに老人から離れると老人を睨んだ。

「危ないじゃないの。転んで怪我でもしたらどうしてくれるわけ。」
アメリカはそれから心配するアレンやニーナの対応をする。彼女は彼女の異変を見ていないようだ。老人が上手い嘘をついて二人を納得させている。本当は別の理由で引つ張られたのだ。何か引つかかる。彼女は何かを忘れている。そして、それを思い出すことを老人は良く思っ居ないようだ。何かあるのだろうか。

アメリカは考えてみる。あの丸い塊に触れようとしたら彼女の手は変形した。彼女は何で出来ている。ここで何があつたのだ。

気が付けばニーナがアメリカの前に居た。心配そうに見ている。気分が悪そうに見えたらしい。彼女は首を横にふり、大丈夫だと言つた。彼女は顔を上げてニーナを見る。その先に丸い塊が見えた。

「あつ……。」

アメリカが離れた場所から丸い塊を見た時、頭の中を複数の映像が流れていく。頭の中で目の前にある核とそれを触れようとする腕が見えた。これは確かに彼女の腕だ。彼女の手の先から変形している。彼女は頭を抱えた。それでもなお映像は続く。彼女の手が核に触れると徐々に光を失い、ただの丸い塊となつてしまった。彼女はなんとなく城が止まつてしまったと思つた。直後、映像が真つ暗になる。

「私は、誰なの。」

アメリカは核に二、三步近づく。もちろん老人はそれを遮ろうとする。

アメリカは点滅する丸い塊の存在も、彼女の手が変形した理由も思い出した。

「大丈夫。どうしたの。」

アレンが聞いてくるが、アメリカは何も言えない。今見たことなんて言えない。老人は見れば目が合う。彼は首を横に小さく振る。何も言うなということだろう。それなら、何も無かったことにしよう。

「いいえ、何でも無いわ。気にしないで。」

何もなかった事にすれば良い。それよりも、早く二人と一緒に城外に出なければいけない。

「早く行きましょう。」

アメリカたちは部屋を出て再び通路に出た。先ほどまでとはまるで違う薄暗い古い通路、使われた形跡の無い床。

「この通路をまっすぐ行くと出口がある。ここから先は私には行けない。」

老人は鍵を取り出して、アメリカに渡した。

「これが出口の扉を開ける鍵です。気をつけてください。」

老人は扉を閉める直前、アレンとニーナに何か告げていた。老人が喋った内容はアメリカの位置からは聞き取れなかった。アメリカは周りを見た。通路にくもの巣が張っている。しばらく誰も使っていないようだ。彼女はアレンを先頭に進ませた。こういう時は男が先頭で進んだほうが良い。彼はくもの巣を払いながら進んでいく。

「なんなのよ、このくもの巣は。」

アメリカたちがくもの巣に嫌気が差してきた頃、通路の終りが見えた。

「あの扉が出口なの。」

背後からニーナの声が聞こえてくる。通路は行き止まりで扉しか

ない。

アメリカはここが出口だろうと思いつながら手持ちの鍵で扉の鍵を開けた。彼女が扉を開けようとしたとき、ニーナが扉に触れる。

「私が一番に出るんだから。」

ニーナは扉を開けて出て行った。

「やっと外だ。」

アレンが扉から出ようとした時、外から悲鳴が聞こえてきた。アレンはすぐに外へ出た。アメリカは扉から外を見る。その光景に絶句した。

「嘘でしょ。どうして。」

そこには矢の刺さったニーナが居た。彼女を抱きかかえるアレン。出入り口を遠巻きに囲む兵士たちが見えた。みんな弓矢を持っている。

兵士たちが再び弓を引きはじめた。このままでは外に居る二人が危ない。

「お願い、止めて。」

アメリカが気が付いたとき、彼女は両手をいっぱい広げてアレンとニーナの前に居た。

最終話 メカニカルキングダム

最終話 メカニカルキングダム

アメリカは兵士たちと対峙する。兵士たちの中にざわめきが起こる。その中でみんな弓を下ろしていた。

「大丈夫か。おい、しっかりしろ。」

ニーナはアレンの呼びかけになんとか反応している。身体に刺さった矢。痛々しいことこの上ない。

再びの悲鳴。アレンがニーナから矢を抜いたのだ。

「ちよっと。大丈夫なの。」

アメリカは背後に居るアレンに言う。こういう場合は抜いてしまっているのだから。悪化するような気が……。

「ふふふ、罪ってこんなに重いんだね。いままで知らなかった。」

「ニーナ。しっかりしろ。」

アメリカはアレンが兵士たちを見ているのがわかった。アレンが立ち上がる。

「助けてくれよ。なあ、頼むよ。」

アメリカは兵士に向かって歩き出すアレンを止めた。兵士たちは笑っている。

「あいつらが助けてくれるわけないでしょ。」

背後から悲鳴が聞こえる。ニーナが苦しんでいるのだ。

「ニーナ、ニーナ。おい、大丈夫か。」

アメリカが再び兵士のほうに意識を向けると、兵士たちの中から一人の男が現れた。兵士たちの長だろうか。

「私はハウエルと申します。」

ハウエルは深々と頭を下げる。

「王女様。貴女を傷つけたくはありません。速やかに城内へお戻りください。」

アメリカはハウエルを睨み、周りに居る兵士たちを睨んだ。

「あなたたち何をしているの。二人は城から出たのよ。なんで攻撃するのよ。」

ハウエルが何か言おうとした時、彼の肩を叩きながら一人の男が前に出た。

「娘よ。なぜ彼らを助けたのだ。」

それは、王様だった。城内で会ったときと変わらない格好でいまや太陽の下に存在している。

「そんなこと私の勝手でしょ。このゲームは城の外に出れば彼らの勝ち。そうじゃなかったの。」

アメリカは自然と語気が強くなる。これは王様がしたことなのか。城から出ればゲームは終わり。そうだったはずなのに。

「私はルールを無視してはいない。私がルールなのだから。それに、これは犯罪者がこの城を攻略するゲーム。そう、ただのゲームだ。」

アメリカは王様の「ただのゲーム」という言葉に反応する。

「ゲームって何。ゲームだったら人を殺しても良いの。これが何になるっていうのよ。ただ死ぬために城の中を歩き回っているだけじゃない。」

アメリカ自身熱くなっているのが分かる。王様は両手で落ち着けとジェスチャーをしている。そんなもので落ち着けるわけが無い。

「相手は犯罪者です。罪を犯したんですよ。」

ハウエルが冷静に対応する。その冷静さがかえってアメリカを刺激した。

「犯罪者だつて生きているのよ。彼らの命を奪うなんて私たちにそんな権利無いわ。」

アメリカの言葉に王様は笑う。その声の大きさに怒りを覚えた。

「嘘だろ、おいニーナ。ニーナってば。」

アメリカは異変に気づきアレンたちを見る。横たわるニーナは、すでに事切れていた。直後、アレンの叫び声が空に広がる。ニーナはもうこの世には居ないようだ。アメリカは泣き叫ぶアレンを背後

に再び王様を見た。

「彼女は死んだわ。あなたたちのせいだね。」

王様たちはすました顔でこちらを見ている。

「そうか、ならばあとはその男だけだな。」

兵士たちが一斉に弓を引く。

アメリカはその光景を見てすべてが嫌になった。王様も、王様に従う兵士たちも、そしてゲームが行われるこの城もみんな全部。

「私、死ぬわ。」

アメリカは大きいため息をつきながら腰に着けた剣を抜く。そして、剣の先を自分自身の喉元に突きつけた。

「彼を殺すんでしょ。だったら、私も死ぬわ。こんな世界。私は居たく無い。」

兵士たちの中にざわめきが起こる。流石に予想外だったのかもしれない。兵士たちの中には弓を降ろしている者も居る。

「止めなさい。お前が死ぬ必要は無いんだ。」

アメリカは剣を喉元に近づける。

「じゃあ、もうこんなゲームは止めて彼らを助けてよ。私たちが裁くことの出来るものじゃないわ。」

アメリカの言葉を王様は聞かない。ただ、止めなさいと言うだけだ。それしか知らないみたいだ。彼らは何も変えられないという事だろうか。

「そう。ならいいわ。城内の人間を全員外に出して。」

アメリカは対話を切り上げた。これ以上話していても終わりは見えない。

「それは出来ない。一体どのくらいの人間が城内に居ると思って……。」

「早く。城を止めるわよ。」

アメリカの言葉に王様の顔が変わる。見てはいけないものを見ているような顔だ。まさか、知らないとも思ったのだろうか。

「城を止めるって……。」

アメリカは背後から聞こえる声を制止する。再度、王様たちを見た。

「さあ、早くしてよ。早くしないとあなたの娘が自殺するわよ。困るんじゃない。」

アメリカは笑っている。本当に喉元に剣を突き刺してしまいそうだ。もう後戻りは出来ない。先に進むだけだ。

王様はハウエルに何か言っている。彼は一礼すると何処かへ走っていった。

「わかった。少し待ってくれ。だから、その剣を降ろすんだ。」
アメリカはいやだと即答する。命令をしているのは彼女だ。命令されたくは無い。

しばらくすると兵士の背後に人だかりが出来ていた。町の人間も居るようだが、明らかに城内の人間も混ざっている。王様の言葉も嘘ではないようだ。

徐々に人が増えていく。全員が王様たちとアメリカを見守っている。

「アメリカ様。」

エドガーも出てきたようだ。アメリカは彼に頷く。いつの間にか王様の傍にはセバスチャンが居た。二人で何か話している。王様は頷くとアメリカを見た。

「全員城から出たようだ。さあ、剣を降ろしてこっちにおいで。」

アメリカは微笑む。そして、背後に居るアレンに小声で告げた。

「城内に戻るわよ。ゆっくり後退して。」

アメリカはアレンからの返事を聞くと一歩ずつ後退した。兵士たちは弓を引くも王様に止められた。

アメリカが出入り口まで数歩のところまで来たとき、剣を喉元から少し遠ざけた。

「今よ走って。」

アメリカの合図とともにアレンと彼女は出入り口から城内に入った。背後から飛んできた矢が真横の壁に当たる。

「早く閉めて。」

アメリカが城内に入るとアレンは勢い良く扉を閉めて鍵をかけた。扉に矢が当たっているのが分かったが、矢ぐらいではびくともしない。

「核のある部屋に戻りましょう。」

アメリカは通路を走り出す。全員出たということは何時かこの城の動力源も尽きる。それまでにしなければならぬ事がある。

「ニーナは置いていくの。それに城を止めるって……。」

「彼女をどうやって持つてくるのよ。無理だわ。それに、さすがに彼らでも死体に変なことしないわよ。周りにいっぱい人が居るんだもの。」

アメリカはアレンの質問の残り半分を答えることもなく必死に走って核のある部屋に入った。彼女は部屋に入った途端に立ち止まる。「お帰り。おおかた城を止めに来たんだろう。」

そこには老人が居た。老人はこうなることを予測していたのかもしれない。

「だから、城を止めるって何。」

アレンはまだ言っている。

「後で教えてあげますよ。だから、今は黙っていてください。」

老人の言葉にアレンは黙る。教えてくれる人間が居なければどうしようもないのだ。

アメリカは心を落ち着かせると、核の前に進み出た。

「ねえ、アレン。約束して欲しいの。」

アメリカは目の前にある核を見つめたまま、背後に居るアレンに言った。

「これから何が起ころうとも、必ず生きてこの城を出て。」

アメリカは振り返りアレンを見た。

「新しい時代を作って。」

アレンはこれから起ころうことを知らない。けど、彼は覚悟を決めたように頷いた。

アメリアは安心すると、目の前の核に左手を近づける。近づくと手は波打ちその下から銀色の何か違うものが見えてくる。手の先から腕にかけて本来の色を失い、銀色に染まる腕。それでもさらに近づける。痛みなどない。ただ、夢みたいに左腕が変形している。アメリアの手が核に触れると、点滅間隔がしだいにゆっくりとなった。その時、彼女は初めて痛みを感じた。胸の痛み、激痛の中、核を見れば点滅に反応しているようだ。痛みを耐え切れず叫ぶ。さらに点滅はゆっくりになり、やがて消えてしまった。それともアメリアの身体に走る激痛も治まった。

「とっ、止まった。」

アメリアはその場に崩れ落ちた。起き上がることも目を開けることも出来ない。すると、目は見えないが、誰かに抱えられたようだ。

「アメリア。大丈夫。」

声はアレンだった。呼び捨ても、名前を読んだのも始めてだったような気がする。悪くは無い。

「アメリア様。」

今度は老人のほうだ。彼はこの行為を知っている。だから、この後のことも分かるだろう。

「ねえ、アレンを外に連れてってあげて。お願い。」

アメリアは真っ暗な闇の中、老人が居るであろう方向に向かって言った。

「わかりました。アメリア様はゆっくりお休みください。」

アメリアは老人の言葉に安心すると同時に激しい眠気に襲われ、そのまま深い眠りへと落ちていった。

強い風の中。頭から布を被った一人の男が墓に語りかけている。

「自分だけ生き残ってしまった。本当に、何だったんだろう。」

一際強い風によって頭を覆う布が取れた。男はアレンであった。

「もう行くよ。しなきゃいけないことがあるんだ。」

アレンは立ち上がり、歩き出した。

この国には至るところに機械仕掛けの仕掛けが散乱している。子供たちが扱えるほどだ。そして、この国の城は二つある。いや、正確には片方は城では無く巨大なベッドと言っべきだろう。

アメリカのベッドだ。何時起きるかわからない。二度と起きないかもしれない彼女。けど、起きたらこう言おうと思っ。

お帰りなさい、と。

アレンはもう一つの城を見た。これは王様が新しく作った城だ。アメリカという存在は消えて、今は王様とお后たちが住んでいるそ。うだ。話ではゲームももう行われていないらしい。

アレンは布で頭を覆うと歩き出した。

彼らは本当に変わったのだろうか。いや、何も変わっていないのかもしれない。

だって、彼らは機械仕掛けじゃないから。

メカニカルキングダム 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7022i/>

メカニカルキングダム

2011年2月11日23時55分発行